

INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第22回総会報告	事務局	1
■第41回運営委員会報告	事務局	2
■第22回大会会計報告	大会委員会	4
■第22回大会後記	片桐千明	5
■第22回大会感想		
発生生物学会大会十年一昔	岡田益吉	6
大会印象記	絹谷政江	7
大会後の雑感	吉田昭広	9
■DGD編集委員会より	編集局	11
■事務局をお引き受けするにあたって	塩川光一郎	12
■助成金の案内	事務局	13
■公募のお知らせ	事務局	23
■講演会のお知らせ	事務局	26
■日本学術会議だより		27
■会員異動		29

NO.63

AUGUST 1989

日本発生生物学会

〒194 東京都町田市南大谷 11

三菱化成生命科学研究所発生生物学研究部

会 長：〒 160 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学教育学部 生物学教室
安増郁夫（電話 03-203-4141 内線3911）
DGD編集主幹：〒 606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部 動物学教室
米田満樹（電話 075-753-4082）
DGD編集幹事：〒 543 大阪市天王寺区南河堀町
大阪教育大学 生物学教室
加藤憲一（電話 06-771-8131 内線251）
事 務 局：〒 194 町田市南大谷11
三菱化成生命科学研究所 発生生物学研究部
（幹 事 長） 東中川 徹（電話 0427-24-6244）
（庶務幹事） 北村 邦夫（電話 0427-24-6294）
（会計幹事） 福井 由宇子（電話 0427-24-6250）
学会センター：〒 113 文京区弥生2-4-16
学会センタービル内日本学会事務センター
日本発生生物学会係（電話 03-817-5801）

入退会、会費納入、および出版物（DGD、サーキュラー等）の郵送については、上記学会事務センターに書面で御問合せ下さい。

1989年9月より事務局が移ります。9月以降の問い合わせは新事務局にお願いします。

新事務局：〒 113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部動物学教室第二講座
（幹 事 長） 塩 川 光一郎（電話 03-812-2111 内線 4431）
（庶務幹事） 深 町 博 史（電話 03-812-2111 内線 4433）
（会計幹事） 武 田 洋 幸（電話 03-812-2111 内線 4433）

第 22 回 総 会 報 告

第22回総会は、1989年6月23日午後4時より北海道大学・学術交流会館において開催された。議長に加藤秀生氏（立教大・一般教養・生物）を選出した後、以下の次第で議事がすすめられ、全て承認された。

1. 片桐千明大会委員長挨拶
2. 安増郁夫会長挨拶
3. 1988年度活動報告
 - a) 事務局より：北村邦夫庶務幹事
 - ・会員数 830名（1989年5月18日現在）
 - ・サーキュラー 60～62号発行
 - ・運営委員会を2度開催
第40回：1月20日（東京）、第41回：6月21日（札幌）
 - サーキュラー62号および本号参照
 - ・1990年1月よりDGD編集主幹を北海道大学理学部動物学教室の片桐千明氏にお願いすることとなった。
 - b) 編集局より：米田満樹編集主幹
 - サーキュラー60～本号参照
4. 1988年度決算報告：加藤由宇子会計幹事
5. 会計監査報告：栃内新会計監査委員
監査の結果、適正であった旨報告された。
6. 学術会議報告：星元紀運営委員
サーキュラー60～本号参照
7. 1989年度活動について：安増郁夫会長
第23回大会は1990年5月24日～26日、広島県情報プラザで行う。
8. 1989年度予算案：加藤由宇子会計幹事
サーキュラー62号参照
9. 塩川光一郎新幹事長挨拶
10. 天野実第23回大会準備委員長挨拶
11. 第5回国際無脊椎動物生殖学会議準備状況報告：星元紀運営委員

第41回 運営委員会報告

第41回運営委員会は、1989年6月21日午後7時より札幌市のしんきんけんぽ会館で開催された。出席者は以下の通り（敬称略）。

安増郁夫（会長）、江口吾朗、岡田節人、岡田益吉、近藤寿人、佐藤矩行、嶋田拓、鈴木義昭、竹市雅俊、東中川徹（兼幹事長）、星元紀、山上健次郎、米田満樹（兼編集主幹）（以上運営委員）、加藤憲一（編集幹事）、中辻憲夫、枅内新（以上会計監査委員）、片桐千明（大会委員長）、塩川光一郎（次期幹事長）、北村邦夫（庶務幹事）、加藤由宇子（会計幹事）。

1. 会長挨拶

2. 庶務報告

a. 会員数830名（正会員731名+学生会員99名）

その他賛助会員14団体（1989年5月18日現在）

b. サーキュラー62号発行

c. 助成金関係

- ・東レ（1件）およびブレインサイエンス（2件）関係の学会推薦分については選外であった。

- ・山田関係については応募がなかった。

- ・成茂基金による第11回国際発生生物学会議派遣援助については以下の4名に各20万円贈呈することとした。

加藤秀生（立教大）、広部知久（放医研）、瀧口-林恵子（三菱化成生命研）、後藤弘爾（名大）の各会員。

- ・なお、第11回国際発生生物学会議の招待講演者である竹市雅俊会員に一般会計より10万円を贈呈した。

d. 国際比較生理生化学会議を学会として後援することとした。

3. 会計監査報告

枅内新会計監査委員より適正であった旨、報告された。

4. 編集局報告

本号11ページ参照

5. 編集主幹交代について

米田満樹主幹の1989年12月における任期満了に伴い、次期編集主幹として北大・理学部の片桐千明会員を選出した。

6. 編集委員選出

1990年1月からの編集委員会の編集委員のうち、運営委員会選出の編集委員として次の3名の会員を選出した。

竹市雅俊，鈴木義昭，星元紀の各運営委員。

7. 学術会議報告

サーキュラー60～本号参照

8. 幹事長・事務局交代について

1989年9月以降，事務局を東京大学理学部動物学教室に移し，塩川光一郎幹事長，深町博史庶務幹事，武田洋幸会計幹事のスタッフで事務局を運営することになった。

9. その他

成茂科学器械研究所の永年にわたる成茂基金への援助に対し，感謝状を贈ることとした。

以 上

お詫びと訂正

事 務 局

インホーションサーキュラー62号1ページにある第40回運営委員会報告の記事の一部を次のようにお詫びして訂正させていただきます。

誤

正

8. 次々期大会開催地について
広島大学理学部動物学教室
に大会準備をお願いし，同
教室の天野実氏の承諾を得
た。

⇒

8. 次々期大会開催地について
広島大学の天野実会員を中
心に準備をすすめていただ
くこととした。（詳細は本
63号1ページを参照）

日本発生物学会第22回大会会計報告

1. 収入の部

大会参加費 1,334,000円

内訳 一般 ($5,000 \times 196 = 980,000$)

学生 ($4,000 \times 86 = 344,000$)

特別 ($1,000 \times 10 = 10,000$)*

学会本部より補助金 250,000

要旨集販売 ($3,000 \times 5$) 15,000

広告料 240,000

利子 1,869

収入合計 1,840,869

(* 発表要旨プログラムのコピーを配布)

2. 支出の部

会場費 302,100

会場設営費 (パネル等) 252,320

印刷費 57,300

通信費 6,825

文房具 33,566

会議費 (編集委, 運営委) 補助 29,500

謝金 (看板, ポスター等) 30,000

アルバイト人件費 ($19人 \times 3日$) 342,000

弁当代 90,000

茶菓代 78,176

懇親会補助 199,178

準備委員会開催 100,000

支出合計 1,520,965

3. 残金

319,904円**

(**振込手数料200円を差引, 319,704円を学会本部へ寄付)

第 22 回 大 会 後 記

大会委員長 片 桐 千 明

第22回大会の会期を気候のよい6月下旬に設定したあとは、例年通りに、口頭とポスターによる発表を併用し、シンポジウムは申出を待って調整する、という姿勢で参加申込みを待ちましたが、3月下旬の締切りが近づくと講演申込みがどれだけあるか（プログラムの組みかた）、また大会当日近くなると当日参加がどれだけあるか（経理のバランス）が気になったことは事実です。しかし終ってみると、このいずれもが杞憂でありました。講演数は145題で前年度と前々年度の中間、ポスターと口頭による発表数を主催者側で調整する必要もなく済みました。会場のスペースに余裕があったため用意できたポスター用パネルがゆったりとし過ぎて、わざわざ電話で確認（大き過ぎるのではないが）を受けたりする一幕もありましたが、ポスター発表と口頭発表を併用するいきかたもこの学会では定着しつつあるように思えました。今大会程度の口頭発表数であれば、午前と午後、適宜休憩時間（コーヒープレイク）を30分とることができました。講演を聴く時間を集中させるほか、A、B両会場での進行のずれを補正するのにも幾分役立ったと自負していますが、如何だったでしょうか。

主催してみても改めて実感させられたのが、当日参加者が多いことで、今年の場合、記録に残っている参加者292名中、約90名が当日参加でした。そのため予備として用意していた要旨集が足りなくなり、初日の夕方ゼロックスコピーを急ぎょ作らねばならぬ破目になり、一部の当日参加の方に御迷惑をかけたことを御詫びします。当日参加が多い主な理由は要旨集が全会員に配布され、それをみての参加希望者が出るためと思われます。それはそれで好いことなのですが、実は要旨集が届いていなかったという創立以来の会員の申出を受けました。新たに入会手続きをすると同時に大会参加申込をする場合にも配布されなかった例があったようです。大会主催者が学会事務センターから要旨集の発送先リストをもらってチェックする、という方式を採る必要があるように思います。

札幌でこの大会を開催するのはちょうど10年ぶり、ということもあって大会終了後に古びた第12回大会の講演予稿集をひろげてみました。講演数が100題前後ということもありますが、講演時間は何と20分でやっていたのでした。また遺伝子そのものを扱った話は鈴木義昭さんによる特別講演ただひとつであったことをみると、10年間の変ぼうには眼を見張るものがあります。遺伝子操作の技術を使った研究発表がとりわけ多かったのが今大会の傾向であったとは、何人かの参加者からも聞いたことではありましたが、10年後に今大会の要旨集を開いたとき、いま第12回大会のそれから、まだ読みとれる熱気を再び感じるができるものであってほしいと願わずにいられません。

発生生物学会大会十年一昔

岡 田 益 吉 (筑波大学生物科学系)

片桐大会委員長は総会の挨拶の中で、ちょうど十年前に札幌で開かれた第12回大会と今回の第22回大会とを比較されて、演題数は104から145に増加した。これは甚だしく増えたといえるかどうかかわからないが、講演内容の変化には目を見張るものがある、という意味のことを述べられた。

「この数年、発生生物学の「分子化」または「遺伝子化」が急速に進み、発生現象を分子の言葉で理解しようという意見を支持する人々が増加の一途をたどっている。発生を、体を構成する全ての細胞における遺伝子発現の時間的空間的統合として捕らえ、それを調節する機構を明らかにする事が発生生物学の最も重要な目的であるとする考え方が支配的となってきた。この十年はまさにこの変化の時に当たっていたわけで、日本の発生生物学界も当然その変化の渦巻の中で、世界の潮流に遅れないような健全な成長を遂げており、片桐先生の感慨もまことに宜なるかなと思われる。

事実、今回の大会で発表された演題のうち67題が発生の調節機構を分子レベルで解明することに直接携わっている研究のように思われる。むろんこれ以外に、直接分子や遺伝子を扱っていかなくても、頭の中では分子機構を考えていると思われる研究が幾つもあったようである。10年前の大会(実は第12回大会の要旨集が手元になかったので第13回大会のものをしているのであるが)では、ほんの数編がとにかく分子(mRNA, rRNA等)を扱い、10に満たないものが一応遺伝子レベルの調節機構を考えているようであるが、まだとても標的が視界に入っているようには見えなく、闇夜に鉄砲に近い状態であったことを思えば、この10年の変化には驚くほかはない。そして、性能の良い映写設備、座り心地の良い椅子、快適な気候、そして行き届いた会場運営、どれをとっても立派であった今大会であったが、特に私の感じたのはプレゼンテーションに心を配った講演が多かったこと、そして狙いの明かな研究が多かったことであった。これは今年に限らず、最近の傾向で、観衆無視の発表が年々減っているのは喜ばしいことである。

とはいっても、いくつか問題がないわけではない。一つはポスターであるが、はなはだ玉石混交であった。研究自体は多分立派なものと思われるが、高校の文化祭よろしく、ずらずらと字ばかりが並んで、しかも講演要旨集の頁を破いて貼ったのかと思うくらい字が小さすぎて、とても、とても読む意欲が湧かないようなものが見受けられた。もっとポスターの利点を活用すべきと思う。

また、口頭発表の方では、塩基配列の図は何かならないものであろうか。せっかくクローニングに成功したので、見せたい気持ちはよくわかるが、特に後方の席からは大規模な視力検査表と同じで全く意味をなさない。むろんきちんと問題点が把握できるように見せてくれた発表も多

かったのであって、あるいは、またかという思いが強かったために私の印象に残りすぎたのかもしれない。しかし、多くの場合は実際の塩基配列を示さないでも、模式的に図示するだけで目的を達するのではなかろうか。

今回は狙いの明らかに分かる発表が多かった、と述べた。これは最近の傾向であり、大変結構なことではある。しかし、これはまた分子化、遺伝子化の結果でもあらうかと思う。何故なら、現在、遺伝子発現の調節機構を調べるためには、その遺伝子がクローン化されていることが必要であり、分子としての遺伝子の構造的特徴、それと結合するタンパク質の探索など、必要な情報を得るために利用し得る技術は現在のところそれほど多岐にわたってはいない。そのために、分子化の進んだ分野の学会では、講演が始まってまもなく、これはゲルソフトアッセイだぞ、と思うとその通りのスライドがでてくるし、これは多分プロモーターの人工的欠失突然変異だなと思うと、これまたその通り、極端に言えば、演題を見ただけで結果がわかり、十人が十人扱う遺伝子は違ってもやっていることは同じ、というような状態になりかねない。このような状態は学問の進歩の過程でしばしば起こってきたことであり、必要なことでもあって、私は何も全面的に否定しているわけではない。むしろ、大勢の人が流行に乗って研究すれば、その集積の中から重要な事実が明らかになってくることは期待出来るであらう。しかし、われわれ生物学者は、ただ単にそこに遺伝子があるからそれを研究するという態度は、出来るだけとりたくないものである。

今大会を見る限り、発生生物学会で発表される研究には、生き物の臭いを強く残しながら、着実に分子化が進んでいることが感じられ、大変頼もしく思った次第である。まず現象があって、その分子的な仕組みを明らかにすることを目指し、そのために必要な技術は積極的に取り入れて利用し、あるいは自ら開発する。しかし分子機構を示すスライドの背景には、常に生きているネズミやショウジョウバエの胚が透視できる。発生生物学会はそのような学会であり続けて欲しいと、私は願っている。

大会印象記

綱谷 政江 (愛媛大・医・解剖)

解剖学教室に勤務し始めて専門分野の学会なのだからと、当然のこととして解剖学会に出席するようになって20年になります。20年間の学会活動というのは、顔馴染みの Professor 達もできて、組織学の基礎ももてるようになり、医学部で行うべき発生学のパートの位置付けも知り、国内の先生方の学問の流れ・系譜も把めるようになりました。発生関係の仕事をしながら医学部に席を移したことに義理立てをして(のつもり?) 発生生物学会にと思いつつも御無沙汰をして打ち過ぎてきています。理学部出身の自分には20年ぶりの動物屋さんの集まり、それも自分の親

元に里帰りするような（発生物学専攻でした）気持ちで出席させてもらった第22回発生物学会大会でした。その経過を耳にされたサーキュラー編集者のお一人の北村先生から是非にと、印象記の原稿の依頼を受けました。自分の不勉強を曝け出すには忍びないと思いつつも、久し振りに立ち戻った者の感じたことを、一過性にしないためにも書かせてもらって、自分への戒めにもさせていただくことにしました。

まず会場で初めに感じたのは若い人達が多いことと、スーツでネクタイを決めている姿に驚きました。医学部にいて、時々これが理学部だとリラックスしてジーンズで仕事をし、先輩達にも気遣わずに本筋の大事なものを大切に話せるのと思うことがありました。それなのに自分の感覚ももはや旧くなったのかと残念になり呟いていますと、最近の若者はお洒落になってきていることと、やはり学会場は礼儀正しくという配慮をするのは何処も同じだと教えていただきました。逆境（？）の立場からの憧憬ないしは過ぎし夢を、それも形で自分が求めていた愚かさを認識させられました。若い研究者の多いことは、大学院生の少ない医学部との違いだったと思います。若い人達が発言されていたのには好感を持ちましたが、諸先輩の姿の少ないのが気になりました。comment なり、suggestion や、萌芽的研究への差し延べてくれるべき手の持ち主の方々はやはり学会場に座られるべきだと思います。最後に話された竹市先生が代理だったにもせよ、カドヘリンのお仕事がまたひとつ進められているのを伺ったとき、聞いたことに満足と尊敬の念を持ったのは私ひとりではなかったと思います。若い研究者の間で、教授レベルの発表もやはり学会場で聞かせていただくべきだと思います。いつもなら選んで聞く演題が、発生物学関係ばかりで休めなくて疲れてしまい、2会場だけなのにロビーで休憩しなければならなかった情け無さは贅沢と言えるものでした。少々ウンザリしたのも事実でした。発生物学会は分子生物学・遺伝子生物学会だったかと今更ながらその潮流の大きさを知り、また若者達の魅き付けられているのがよくわかりました。一体私の知っている発生物学はどこに去ってしまったのかと驚愕・寂寥の思いがいたしました。学問上の流行はひとつの分野への研究者人口の開拓と発展のため、その power は大切と評価いたしますが、古典的 orthodox な仕事もまた捨ててはならないはず、キチッと発生物学の領域の研究は守り育てられるべきだと思います。分野別・専門別の演題にして、何をなすべきかを若い世代にも伝えるべきものと思いました。そこで提案ですが、夜の部を作り、飲みながらも話せる研究会・同好士会・老人グループ会等つくられてはいかがでしょうか？ 三々五々と散って行って自由なグループで話、飲み歩かれた方達も居られたこととは思いますが、外国のシンポジウムの時などのように昼間スポーツをし、夜遅くまでバーで飲みながら話し込んで眠る部屋までといった経験を、クタビれながらも感激したエネルギー的な夜を思いだします。

最後の午後に聞かれたシンポジウムは興味深く拝聴しました。研究をどのように展開しようとしているかということ話をいただけたことは data の個々をお教えいただくよりも私には有意義でした。シンポジウムが学会開催に併設していただけるのは地方に住む身には有難く思います。今後とも是非複数題お願いできないでしょうか？

札幌の皆さんによく準備していただいていたお心遣いが隅々にまで感じられて、気持ち良く過ごさせていただき満足して帰りました。構内の緑が美しく良い季節を選んでいただけたことを感謝しつつ朝の散策を楽しみ、思いがけず良質のコーヒースービスをしていただけたことも私には満たされた要因のひとつでした。ただし懇親会は期待はずれでした。もっと汚くて飾らない場所で北海の海の幸を着に、あるいは野外でジンギスカンかなと期待をして出かけました。立派なホテルでフランス料理だったことをザンネンがるのは、これもまた自分がもう中堅から熟年の方へ近づきつつあることの証しのひとつであり、郷愁・懐古的感傷にすぎなかったのかも知れません。

これからはしばらく続けて発生物学会に出席させていただこうと思います。理学部の発生物学の鋭い頭の面々がいま何を考え、発生物学がどう動こうとしているのか知りたいと思います。自分の鎧を落して flexibility を保つためにも出かけようと思います。最後にサーキュラーに若い人達の意見が自由にもっと載って欲しいものです。

大会後の雑感

吉・田・昭・広(上智大・生命研)

東京の真中でこれを書いていると、数日前のこととはいえ、広々とした北大の構内はじめ、札幌での数日間がたいへん懐かしい。懇親会の席で大会委員長の片桐先生がおっしゃったように「札幌でいちばん良い季節」を選んでいただき、大会の準備、会期中の運営に当たって御尽力下さった片桐先生はじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げたい。

事務局から原稿の依頼をいただき、引き受けはしたものの、例年、大会に出ては「良かった。勉強になった。」という印象以外に、あまり強く感じるものがないので、何を書いたらよいかとまどったというのが、正直なところである。本大会後も、「良かった。勉強になった。」という気持ちが真っ先に来て、それは何より筆者にとっては大切なことであって、それに尽きるともいえる。しかしここでは、それ以外にぼんやりと頭に浮かんでくることや、筆者がここ2年続けて行ったポスター発表の楽しさなどについて思いつくままに述べてみたい。

大会発表は3日間を通じて、クローニング、プロットィング、モノクローナル抗体、等の分子生物学上の言葉が絶え間なく飛び交い、それらに圧倒されるような印象であった。発生物学の進歩が本質的に要請する傾向であろうと思うし、現在のところ蛋白質も遺伝子も全く扱っていない筆者も、研究の今後のステップとして、近いうちに分子レベルでの解析に踏み込みたいという思いを、いっそう強くさせられる。早くそうしたいという気持ちにかられる一方、また、以前ある人から言われたような「みんなと同じことをしていないことによる不安」を抑えておく必要も感じる。そんなときは、「みんなと同じことをしていても面白くない。」と居直ってみることもブ

ラスかもしれない。なにより、自分の研究の必然的ステップを踏みしめながら分子レベルの解析に進んでいくのが理想であって、実りも多いと思う。筆者の行っているパターン形態形成の分野でも、手法が面白い、または現代の最先端のものであるけれども、実質的な進展は少ないと筆者には感じられるものを見かけることもある。

ところで筆者には、本大会を含めて計4回のポスター発表の経験がある。初回は4年前の名古屋での本学会の大会で、このときは発表が全てポスターによるものであった。その頃に比べると、本学会の大会に限らず、おしなべて最近では、ポスター展示がずいぶん見やすく、親切なものになったように思う。また、少し前までは、口頭発表のほうがポスター発表より高級だと感じる人達が多かったようだが（筆者自身そうであった）、むしろ積極的にポスター発表を利用しようとする人達も、少しずつ増えてきたように感じる。しかし、できるだけ大勢の人達に知ってもらいたい内容のものには、やはり口頭発表が適しているし、ある意味ではそうする義務があるとも言える。その意味では口頭発表のほうが「上位」であるとも考えることも、誤りではないかもしれない。しかし、筆者はポスター発表を経験するに従って、次第にこの発表のしかたが好きになってきた。

筆者の感じるポスター発表の長所や楽しさについて、更にのべていきたい。限られた短時間のうちに終えねばならない口頭発表の場合、演者の話の途中での質問は不可能であり、また残された質問時間のなかでも、（他の聴衆の迷惑にもなるので）あまり初歩的な質問をすることは難しい。受け手が内容を理解しようとする場合のこれらの欠点は、ポスター発表の場合は殆ど克服されている。短時間のうちに充分説明しきれないと思う内容や、誤解を生みやすいと思う内容のものは、対話しながら説明できるポスター発表が適している。だから実験系の人達が殆どを占める本学会の大会では、「理論」の発表を行う人達は、ポスターをどんどん利用したらよいと思う。

大会では、興味のある発表を聞くということはもちろん重要なことであるが、筆者にとっては、学問的な話をいろんな人達とできることがとりわけ楽しい。ポスター発表は、そんな時間を充分に与えてくれる。また、知人と話すのはもちろん、高名な先生であれ、若い学生さんであれ、学問的な興味から、初めて話すことができる人達が、このときに多くなるというのも、まことに楽しいことである。一度でも話してみると、その人の研究に対して、ぐっと親しみを感じるようになる。

しかし、正直いうと、ポスター発表は準備がめんどろである。他の仕事も並行しておこなっているときなどは、筆者のように仕事の遅い人間には、結構な負担である。最後に1つ。ポスター発表を行うと、他のポスター発表の説明が聞き辛い。定められた説明時間以外に、発表者をつかまえて説明してもらったりすることもある。発表番号の偶数、奇数で説明時間を別にするなり、何らかの対策が可能なら有難いが。

D. G. D. 編集委員会より

◎今年(31巻)から本誌をA4サイズに改めたので、実質紙面が2割増え、年間70篇程度の論文を掲載できるようになりました。すでに3号までの発行がすみ、編集・出版の体制も大型化にほぼなじんだところです。

◎なお、来年の2号(4月発行予定)は、加藤淑裕先生の記念号となります。これは、招待論文のみからなる special issue です。この他、来年3号以降の regular issues の中に同先生に dedicate する論文を掲載します。会員の皆様からのご投稿をお願いします。サーキュラー62号にご案内したとおり、dedication であるむねのフットノートをつけたものを11月30日までに現主幹の米田宛お送り下さい。

◎現編集委員の任期が今年12月で切れるので、6月21日の編集委員会は、今期の活動をふりかえり、次期の編集体制について次のような提言をまとめました。

1. 学会大会の講演要旨を本誌に掲載し始めて、ちょうど10年たつ。会員にとってのメリットと考えた当初の目的は、時代の推移によって変わってきたと思われるので、この際見直すべき時期である。
2. 記念号という形の special issue が国際誌ではあまり見られなくなった現状を考え、D. G. D. も今後は記念号を出さない方向を基本とする。
3. 学会大会で講演される研究分野のスペクトルと、D. G. D. に掲載される論文の分野との間にズレがある。依頼すべき総説のテーマを適切に選ぶのが、このズレを調節するのに役立つと思われる。
4. 総説の掲載はこれからも続け、学会誌のコスというべきオリジナル論文と総説の充実をはかる。

なお、このまとめを同日の運営委員会で披露したところ、上の1については反対があり、講演要旨はなお掲載すべきだという意見が強く出ました。講演要旨の掲載は本来編集委員会の業務ではないので、次期の運営委員会がもっぱら検討すべき議題です。2～4の方針は、次期編集委員会に引き継がれることと思います。

◎6月21日の運営委員会で、1990年度からの編集主幹は北海道大学の片桐千明会員に委嘱することに決定しましたので、現主幹と現幹事の役目も今年限りで終わります。早手まわしですが、引き継ぎの日程を両主幹の間で打ち合わせました。

今年11月30日までのご投稿は現主幹の米田まで、今年の12月1日以後のご投稿は

〒060 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学理学部動物学教室

D. G. D. 編集主幹 片桐 千明

宛にお送り下さい。

編集主幹 米田満樹・編集幹事 加藤憲一

事務局をお引き受けするにあたって

塩 川 光一郎（東大・理・動物）

私、平成元年4月1日付で水野丈夫教授の後任として、東京大学理学部動物学第二講座に九州より赴任して参りました。そのことが決って間もなく、会長の安増先生から学会の事務局を引き受けてもらえないだろうか、というお話がありました。水野先生は以前に一度、竹内重夫、八杉貞雄の両氏と共に学会事務局を引き受けておられます。研究室のメンバーもかなり変わったので、“この際もう一度どうだろうか”という会長のご意向でした。私どもの研究室のスタッフとも話し合った結果、“誰かがやらなくてはならない仕事だから”ということで、お引き受けすることに致しました。

これはおそらく会員の皆様の一致したご意見だと思いますが、日本発生生物学会というのは、その比較的小さなサイズにも拘らず非常に活性の高い学会であります。そして内外におけるその役割も近年ますます大きくなっております。また今日の学会があるのはこれまでの諸先輩の努力の賜物です。このように考えますと、“これは大変なことをお引き受けしたな”と、責任の重さを痛感致します。ただ、私どもの研究室の若い二人のスタッフ（深町博史、武田洋幸の両氏）のやる気と、八杉氏の経験とを活かして、何とか責任を果たすことができるのではと思っております。もっとも、私たち事務局としては一生懸命にやっているつもりではありましても、実際には至らないところが多々あるかと思います。会員の皆様に何かとご迷惑をおかけするかと思いますが、どうかよろしくお願い致します。

私ごとで恐縮ですが、私、住み慣れた九州を出て東京の地に移る時にいささか考えたことがございます。それは地縁、血縁のない東京に出て行くめぐりあわせになったからには、逆にそれを活かして、できれば今までにない新しい視点からものを考えるよう努力してみよう、ということです。今回、はからずも伝統ある発生生物学会の事務をお世話することになったわけですが、これをよき勉強の機会と捉え、この初心を忘れず、いろいろな研究をやっておられる方のご意見をよく聞いて、学会をさらに活性化するよう微力ながら力を尽くしたいと考えております。会員の皆様のお力添えを、どうかよろしくお願い申し上げる次第であります。

助 成 金 の 案 内

1. 東レ科学技術研究助成および科学技術賞候補者の推薦について

東レ科学振興会より、下記の要領が届きました。応募者は事務局へ推薦用紙を請求して下さい。

- a. 申請期限：8月末日
- b. 申請先：事務局

第30回（平成元年度）

東レ科学技術賞候補者推薦要領

平成元年 7 月

- 1. 候補者の対象……貴学協会に関する分野で、下記に該当するもの
 - (1) 学術上の業績が顕著なもの
 - (2) 学術上重要な発見をしたもの
 - (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
 - (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの
- 2. 科学技術賞……1件につき正賞：金メダル・副賞：300万円（2件前後の予定）
- 3. 候補者推薦件数……1学協会から2件以内（昭和63年度に推薦された候補者（注a.）は外数とします）
- 4. 推薦者……学協会の代表者
- 5. 推薦手続……所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会宛1部ご送付願います。
- 6. 推薦締切期日……平成元年10月11日（水）必着
- 7. 選考方法……下記委員からなる選考委員会を設けて選考し、評議員会において受賞者を決定します。

選 考 委 員（順不同）

委員長 今堀 和友

近藤 次郎 有馬 朗人 江口 吾朗 増子 昇 家田 正之

宮澤 辰雄 伊達 宗行

8. 科学技術賞の贈呈……平成2年3月の予定

- (注) a. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象といたしております。したがって昭和63年度に推薦された候補者については、平成元年度候補者として再度推薦の必要はありません。ただし昭和63年度の推薦以後において、追加すべき顕著な業績又は発表や受賞があった場合は、昭和63年度推薦書（copy）に加筆して当会あてご送付願います。
- b. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- c. 受賞者は、原則として1件1人とします。特に複数であることを必要とするときはそれらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合でも1件として取り扱います。
- d. この科学技術賞は、所得税法（第9条第1項第18号二）の規定により非課税となっています。

（推薦書提出先・連絡先）

財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号（東レビル）

TEL：(0473) 50-6103 FAX：(0473) 50-6082

東レ科学技術研究助成候補者推薦要領

1. 候補者の対象……………貴学協会に関する分野で基礎的な研究に従事し、その研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる**独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者、またはそのグループ。**
2. 研究助成金……………総額1億円前後、10件程度としますが、とくに重要と認められる研究については3,000万円程度でも助成を考慮します。
3. 推薦者……………学協会の代表者および推薦委員。
4. 候補者推薦件数……………1学協会から2件以内および1推薦委員から1件以内。
5. 推薦手続……………所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会宛1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日……………**平成元年10月11日(水) 必着**
7. 選考方法……………下記委員からなる選考委員会を設けて、提出された書類により一次選考を行い、更に面接による二次選考を経て、評議員会において決定します。なお、二次選考対象の代表研究者の方は、平成元年12月下旬または平成2年1月上旬のいずれかに面接をさせていただきます。

選 考 委 員（順不同）

委員長 今 堀 和 友

近 藤 次 郎

有 馬 朗 人

江 口 吾 朗

増 子 昇

家 田 正 之

宮 澤 辰 雄

伊 達 宗 行

8. 研究助成金の贈呈……………平成2年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. 環境問題等人類の生存に関係の深い基礎的な研究についても、ご配慮いただければ幸いです。
- c. この研究助成金は、研究目的を達成するために有効に使用されるものであれば、どのように使われるものを申請されても結構です。ただし、助成金受領後、その使途を変更する必要が生じた場合は、予め当会の承諾を得ていただきます。
助成金は使用期間の制限がありません。
- d. 助成金の受領者は、年次毎に研究経過報告書を、また研究終了時に助成研究終結報告書を提出していただきます。
- e. この助成金は、所得税法(第9条第1項第18号二)の規定により非課税となっています。

(推薦書提出先・連絡先)

財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)

TEL: (0473) 50-6103 FAX: (0473) 50-6082

2. 山田科学振興財団関係の助成金

山田科学振興財団より次の2件の募集がきています。これらについては学会の推薦を必要としませんので、応募される方は財団より所定の用紙を受け取られ、所属機関の認定を受けた上、直接財団に申請して下さい。

- i) 短期間来日援助
- ii) 派遣援助(短期間/長期間)

援 助 名	募 集 開 始	申 込 期 限
短 期 間 来 日 (1990年4月～1991年3月分)	1989年4月1日	1989年11月30日
長 期 間 派 遣 (1990年4月～1991年3月分)	1989年4月1日	1989年11月30日
短 期 間 派 遣	出発月の4ヵ月前の15日が申込期限 (例: 1989年10月出発の場合1989年6月15日が申込期限)	

なお、1990年度山田科学振興財団研究援助につきましては、学会の推薦を必要とします。

応募用紙送付: 1989年9月より

学会内申請期限: 1990年1月末日

応募用紙請求先: 新事務局



山田科学振興財団短期間来日援助申込要領

援 助 の 趣 旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事し、高度の研究業績を持つ在外の研究者が、学識を交換して学術の国際交流を促し、又研究を共にして、相互に研究の学際的あるいは国際的進展を図る等を目的として、短期間(通例3カ月以内)来日するための援助を行う。

援助金

- イ. 本年度の総額 派遣援助と併せて6,500万円の予定
- ロ. 渡航費、滞在中の国内旅費、滞在費等

申込手続

- イ. 所定の用紙又はその写しに必要事項を記入する。
- ロ. 招へい状、推せん書、連絡の往復書信、申込者及び来日者の業績一覧表、その他申込者において補足説明を要すると判断される場合は、その説明書を添付する。
- ハ. イ、ロ、共おのおの3部ずつご送付願います。

記載上の注意

- イ. 黒インクで明瞭に記入して下さい。
- ロ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ハ. 外国人名は、フルネームを活字体で書き、読みかたをフリガナで示して下さい。邦人名にはフリガナを付けて下さい。
- ニ. 欄外の脚注には記入しないで下さい。

申込期限

1989年11月30日(1990年4月1日～1991年3月31日に来日予定の方)

選考方法

選考委員によって選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知

申込者にあてて通知します。

援助金の贈呈

申込者にあてて適時贈呈します。

申込書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
電話 大阪(06) 757局 3311(代表)

付

- イ. 援助金の使途を変更するときには、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 申込者及び来日者には、援助による成果について報告書の提出を求めます。
- ハ. 成果について刊行する場合には、本財団の援助による旨書き添え、その別刷2部をお分け下さい。
- ニ. ご提出いただきました申込書は、返却いたしません。

山田科学振興財団派遣援助申込要領

援 助 の 趣 旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事する研究者を国外に派遣し、学識を交換して学術の国際交流を促し、又研究を共にして相互に研究の学際的あるいは国際的進展を図る等のために、次のイ、及びロ、の援助を行う。

- イ、高度の研究業績を持つ研究者を、講演、討論等を主目的として、短期間（通例 3 カ月間以内）派遣するための渡航費の援助

- ロ、高度の研究活動を実施しつつある新進研究者若干名を、協同研究への直接参加を主目的として、長期間（通例 3 カ月～1 カ年間）派遣するための渡航費、滞在中の国内旅費、滞在費等の援助

援助金

本年度の総額 来日援助と併せて6,500万円の予定

申込手続

所定の用紙又はその写しに必要事項を記入し、次のイ、ロ、の各文書あるいはそれらの写しを添え、おのの3部ずつご送付願います。

- イ 短期間派遣にあつては、1. 集会の内容を紹介する文書 例えば、集会のサーキュラー及びプログラム等 2. 講演・発表等の要旨 3. 派遣先と交わした申込者又はこれに代る人からの往復書信等の連絡書信 4. 研究指導者又は所属機関長の推薦書 5. 最近3カ年間の研究報告のリスト
ロ、長期間派遣にあつては、1. 直接指導者又は所属機関長による本申込及び本研究に対する評価又は推薦の文書 2. 派遣中の具体的な研究計画書及びそれを本人が英、独あるいは仏訳したもの 3. 受入先の発行した招へい状及び受入受諾を確証する約定書 4. 派遣先と交わした申込者又はこれに代る人からの往復書信等の連絡書信 5. 研究報告のリスト

記載上の注意

- イ、黒インクで明瞭に記入して下さい。
ロ、紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
ハ、外国人名は、フルネームを活字体で書き、読みかたをフリガナで示して下さい。邦人名にはフリガナを付けて下さい。
ニ、欄外の脚注には記入しないで下さい。

申込期限

イ、短期間派遣

出発予定日より4カ月前の月の15日

（例：10月に出発予定のときは6月15日が申込期限内に当たる）

ロ、長期間派遣

1989年11月30日（1990年4月1日～1991年3月31日）に出発予定の方

選考方法

選考委員によって選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知

申込者にあてて通知します。

援助金の贈呈

申込者にあてて適時贈呈します。

申込書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団

(Yamada Science Foundation)

〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号

電話 大阪(06) 757局 3311(代表)

付

- イ、援助金の使途を変更するときには、予め本財団の承諾を得て下さい。
ロ、申込者には、援助による成果について報告書の提出を求めます。
ハ、成果について刊行する場合には、本財団の援助による旨書き添え、その別刷2部をお分け下さい。
ニ、ご提出いただきました申込書は、返却いたしません。

1990年度

山田科学振興財団研究援助候補推薦要領

援助の趣旨及び内容

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助をします。実用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は1件あたり300～700万円、総額6,000万円、援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考します。
3. 援助金を給与にあててはできませんが、他の用途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年度間とします。

推薦方法

- イ. 推薦者 本財団が依頼した学(協)会の代表者
- ロ. 推薦件数 1推薦者ごとに2件以内
- ハ. 推薦手続 推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。
 1. 所定の推薦書用紙又はその写しに必要事項を記入したもの。4部
 2. 添付書類

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 推薦書1ページ欄外の脚注には記入しないで下さい。
- ハ. 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日 本財団へ推薦書が到着する締切期日は1990年3月31日です。

選考方法 選考委員会において選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知 1990年7月末迄に推薦者及び代表研究者等にあてて通知します。

援助金の贈呈 選考結果の通知後適時贈呈します。

推薦書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
電話 大阪(06)757局3311(代表)

研究の成果又は会計の報告

援助金の受領者に対して、必要に応じ、研究経過、研究成果、又は会計について報告書の提出又は発表を求めます。

付

- イ. 援助金の用途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 研究成果を文書によって発表される際には、本財団(財団法人 山田科学振興財団, Yamada Science Foundation)の援助による旨を記載し、報文の類にあってはその別刷1部、また著書の類にあってはその1部をご寄贈願います。
- ハ. ご提出いただきました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

研究者各位へ

推薦者の項に対応する学(協)会は次記のとおりです。学(協)会により締切期日及び募集方法等が異なりますから、代表研究者は応募の際、各学(協)会にお問い合わせ願います。

日本天文学会	地球電磁気・ 地球惑星圏学会	日本薬学会	日本分子生物学会	日本発生生物学会
日本物理学会	日本化学会	日本生化学会	日本動物学会	日本植物生理学会
応用物理学会	高分子学会	日本生理学会	日本細胞生物学会	日本植物学会
日本金属学会	日本農芸化学会	日本遺伝学会	日本生物物理学会	日本免疫学会

3. ブレインサイエンス振興財団関係の助成金

ブレインサイエンス振興財団よりの以下の4件の募集がきています。応募される方は9月1日以降新事務局から申請用紙を受け取って下さい。

日本発生生物学会内での締め切りを11月20日とします。

第4回研究助成候補者推薦要領

(寄附行為第4条第1号、研究助成事業)

平成元年7月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は、脳神経に関する実験研究のみならず理論・モデリング研究をも含む。候補者は、単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。

2. 研究助成金

助成額は1件100万円、助成件数は8件以内とする。

3. 推 薦 者

(1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい)

6. 推薦締切日

平成元年12月20日(水)とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 採否の通知

平成2年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成2年5月末までに研究助成金を送呈する。

10. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお、経理報告書を平成3年4月中に提出すること。

11. 成果の報告

研究の成果については、平成3年4月中に成果報告を当財団に提出するものとする。また、財団主催の研究会において発表を御願ひする。助成金による研究を専門誌に発表する場合には、“財団法人ブレインサイエンス振興財団(英文の場合は、Brain Science Foundation)の助成による”旨を書き添えること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重州2丁目6番20号

電 話 03(273)2565(直通)

第4回塚原仲晃記念賞受賞候補者推薦要領

(寄附行為第4条第2号, 褒賞事業)

平成元年7月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者(国内外を問わない。)に対して塚原仲晃記念賞を贈呈する。

2. 褒賞金

贈呈件数は2件以内とし, 賞牌ならびに副賞(100万円)を贈呈する。

3. 推薦者

(1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1 推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し, 当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい。)

6. 推薦締切日

平成元年12月20日(水)とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し, 理事会において決定する。

8. 選考結果の通知

平成2年3月末日までに推薦者および受賞者あて通知する。

9. 塚原仲晃記念賞の贈呈 その他

贈呈決定者に対して, 別途通知する。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03)273-2565(直通)

第3回海外研究者招聘助成候補者推薦要領

(寄付行為第4条第3号, 国際交流事業)

平成元年7月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘(旅費または滞在費)を助成する。

ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。

2. 招聘の時期

平成2年4月1日から平成3年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。

3. 助成予定額

(1) 予算として100万円を計上している。

(2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃または滞在費とし、50万円までを限度として必要額を助成する。

4. 推 薦 者

(1) 関係学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

5. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

6. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いても良い。)

7. 推薦締切日

平成元年12月20日(水)とする。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成2年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成2年4月から必要に応じて受入責任者に送呈する。

11. 助成金の使途

外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

招聘の成果について、招聘後2ヶ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重州2丁目6番20号

電話 (03)273-2565(直通)

第3回海外派遣研究助成候補者推薦要領

(寄付行為第4条第3号、国際交流事業)

平成元年7月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間(6ヶ月以内)の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。

ただし、平成2年4月から平成3年3月の間に出発出来るものに限る。

2. 助成予定額

(1) 予算として150万円を計上している。

(2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、50万円を限度として若干件を助成する。

3. 推 薦 者

(1) 関係学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いても良い。)

6. 推薦締切日

平成元年12月20日(水)とする。

7. 受入先の承諾書

受入先の承諾書(学会、シンポジウム等参加の場合は、参加証明書または招待状の写を、短期の共同研究の場合は、受入機関または共同研究者の手紙の写)を添付すること。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成2年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成2年4月以降に出発時期に応じて送呈する。

11. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

帰国後2ヵ月以内に派遣の成果について、報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重州2丁目6番20号

電話 (03)273-2565(直通)

公 募 の お 知 ら せ

平成2年度

日本学術振興会ナポリ臨海実験所

派遣研究者募集要項

平成元年4月

日本学術振興会

1. 趣旨

日本学術振興会は、国際学術交流事業の一環として、昭和40年以来イタリアのナポリ臨海実験所（Stazione Zoologica di Napoli—別添資料参照—）に研究者を派遣している。なお、この事業は昭和59年度から、本会とイタリア学術研究会議（National Research Council of Italy-CNR）との間で実施している研究者交流事業の下で実施している。

2. 応募資格

派遣の対象となる者は、我が国の大学等学術研究機関において常勤の研究の職に就いている研究者であること。但し、長期派遣研究者については、平成2年4月1日現在、年齢40歳以下の者とする。

3. 対象分野

海洋生物学の分野

4. 募集人員・派遣期間

◇短期派遣研究者	教授・助教授級	1人	15日～1ヶ月
◇長期派遣研究者	助手級	1人	4～6ヶ月

5. 経費負担区分

◇本会負担：往復渡航費

◇CNR負担：滞在費—短期 100,000 リラ／日

長期 1,600,000 リラ／月

国内旅費（イタリア国内）—実費支給（但し、短期4ヶ所、長期2ヶ所まで）

ナポリ臨海実験所

ナポリ臨海実験所は、1874年ドイツ人 Anton Dohrn によって創設された臨海実験所で、海洋生物の豊富な地中海のほぼ中央に位置し、古い歴史と伝統を誇る国際的な研究機関であり、わが国と同実験所との関係はすでに90年に及んでいる。特に戦後は昭和31年以来、毎年研究者を派遣しており、またそのための分担金も拠出する等、関係諸国のなかでも密度の高い協力関係を生じている。

ナポリ臨海実験所には、現在 1. 比較生化・生理学（生化学、細胞生物学、神経生物学の3研究室）、2. 生態学および海洋学（生物海洋学、海産植物学の2研究室）、3. 底生生物生態学（イスキヤ支所）の3部門があり、水族館、標本室、図書室などが付属している。これらの研究室では、主として次のような研究が行われており、同実験所へ派遣される研究者は、なるべくこれらの研究グループと協同研究を行うことが要望されている。

1. 生化学研究室

ウニ胚の発生におけるDNAおよびヒストンのメチル化、海産動物からえられるD-アミノ酸およびアデノクロムの作用

2. 細胞生物学研究室

海産無脊椎動物、特にホヤの受精における卵・精子相互作用

3. 神経生物学研究室

海産動物卵の受精における電気的現象、海産動物の神経生理

4. 生物海洋学研究室

ナポリ湾の生態系、外洋動物性プランクトンの群集

5. 海産植物学研究室

植物性プランクトンに関する生態生理学

6. 底生生物生態学研究室（イスキヤ支所）

底生生物の生態学、Posidonia の生態系

POSTDOCTORAL POSITION IN DEVELOPMENTAL NEUROBIOLOGY

A postdoctoral position available, pending funding approval, to study the cellular and molecular mechanisms of neural crest cell differentiation. This research uses a wide variety of techniques including cell culture, fluorescence-activated cell sorting, molecular biology, and immunological methods to probe basic mechanisms concerning the control of neural crest cell development. Three recent references are:

Christie, D. S., Forbes, M. E., and Maxwell, G. D. (1987) Phenotypic properties of catecholamine-positive cells which differentiate in avian neural crest cultures.

J. Neurosci. 7:3749-3763.

Maxwell, G. D. and Forbes, M. E. (1987) Exogenous basement membrane-like matrix stimulates adrenergic development in neural crest cultures. Development 101:767-776.

Maxwell, G. D., Forbes, M. E., and Christie, D. S. (1988) Analysis of the development of cellular subsets present in the neural crest by cell sorting and cell culture. Neuron 1:557-568.

The laboratory is located at the University of Connecticut Health Center in Farmington, Connecticut. Farmington is a very safe and pleasant community located just outside Hartford, Connecticut. It is within easy driving distance of Boston and New York.

Applicants should have a strong background in biology with particular emphasis on cellular and molecular approaches.

Please send a curriculum vitae, statement of research interests and 3 references to;

Dr. Gerald D. Maxwell
Department of Anatomy
University of Connecticut Health Center
263 Farmington Avenue
Farmington, Connecticut 06032
U. S. A.

講演会のお知らせ

第39回 科学講演会開催計画

主 催 : 財団法人 東レ科学振興会

千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)

TEL 0473 (50) 6 1 0 4

後 援 : 朝 日 新 聞 社

と き : 平成元年10月4日(水)

開場 17時30分

開演 18時00分, 終演 20時45分

と ころ : よみうりホール

東京都千代田区有楽町1-11-1

読売会館(そごう)7階 (JR線有楽町駅都庁口前)

テ ー マ : “これからの情報”

—学問・教育そして応用をめぐって—

I. 情報科学の体系を求めて —技術から理論へ—

龍谷大学理工学部長

坂 井 利 之

京都大学名誉教授

II. ソフトウェア科学の目標と新しい基礎付け

東北大学工学部教授

伊 藤 貴 康

(情報工学科)

そ の 他 : 入場無料, 定員1100名

☆予約の必要はありません。

☆満員の場合は入場をお断りすることがあります。

以 上

第14期初めての勧告採択される

平成元年 5月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月19日から21日まで第107回総会（第14期3回目の総会）を開催し、第14期初めての勧告を採択しましたが、今回の日本学術会議だよりでは、同総会の議事内容等についてお知らせいたします。

日本学術会議第107回総会報告

第107回総会の主な議事概要は次のとおりであった。

第1日（4月19日）の午前。まず、会長からの前回総会以後の経過報告及び各部・委員会の報告が行われた。次いで、今回総会に提案されている6案件について、それぞれ提案説明がなされた後、質疑応答が行われた。続いて、これらの6案件のうち、「人間の科学特別委員会」を設置する案件については、直ちに採決が行われ、設置が決定された。この件は、前回総会（昨年10月）において第14期活動計画並びにそれに基づく第14期の特別委員会の設置が決定された際に、その付帯申合せとして、この「人間の科学」については、その具体的な進め方に関し、予め検討、整理を行った後に、当特別委員会を設置させることとされたため、前回総会後に、検討会が設置され、問題点の整理が行われてきたものである。

第1日の午後。各学会が開催され、午前中に提案説明された総会提案案件の審議及び設置が決定された「人間の科学特別委員会」の委員の選出等が行われた。

第2日（4月20日）の午前。前日提案された案件の審議・採決が順次行われた。

まず、第6部世話担当の2研究連絡委員会の名称変更（土壤肥科学研連→土壤・肥料・植物栄養学研連、海理工学研連→海水科学研連）に伴う、会則及び関係規則の一部改正が採択された。

次いで、「副会長世話担当研究連絡委員会の運営について（申合せ）の一部改正」が採択された。これは、副会長世話担当研究連絡委員会の在り方についての抜本的な検討とは別に、当面の措置として、副会長世話担当研究連絡委員会のより円滑な運営及び担当副会長の世話機能の充実を図るために、必要な措置を講じたものである。

続いて、「アジア社会科学研究協議会連盟（AASSREC）への加入について」が採択された。これは、平成元年度予算において、当該団体への分担金の支出が認められたことに伴い、当該団体への本会議の加入を総会として議決したものである。

さらに、第4常置委員会の提案による「大学等における学術研究の推進について—研究設備等の高度化に関する緊急提言（勧告）」が採択された。この勧告は、第14期になって採択された初めての勧告である。なお、この勧告は、同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され、関係機関等に送付された（この勧告の詳細は、別掲参照）。

第2日の午後。「人間の科学」について、自由討議が行われた（この自由討議の詳細は、別掲参照）。

第3日（4月21日）午前には、今回設置された前述の人間の科学特別委員会の1回目の委員会をはじめとして、各特別委員会が、午後には、各常置委員会が、それぞれ開催された。

大学等における学術研究の推進について—研究設備等の高度化に関する緊急提言—（勧告）[要旨]

大学等を中心とする学術研究の財政基盤の現状は、甚だ憂慮すべき事態におかれており、この事態を見過ごしては悔いを後世に残すことになる。したがって、長期的観点に立つて、特に基礎研究を育成し、人類の知的共有財産である科学・技術の発展に積極的に貢献することは、経済大国と呼ばれるようになった我が国の当然の責務であり、今こそ、この責務を果たすべき時である。

日本学術会議では、昭和62年4月に「大学等における学術予算の増額について」の要望書を政府に提出した。大学等における学術研究予算を一般の予算要求基準の別枠とすることが肝要である。

特に、早急な対策を検討する必要がある諸点の中で、今回、緊急に次の措置を取るよう勧告する。

我が国の研究経費において、国費の負担割合を引き上げつつ、基礎研究を重視してこれを推進する観点から、国立学校特別会計予算、私大助成及び公立大学補助の各予算について格段の増額を図る必要があり、その際、特に研究設備の整備充実を図るべきである。

そのためには、国立大学の研究設備費や公立大学、私立大学等への研究設備費補助金を飛躍的に増額する措置を取ること、一大学では措置しにくい大型設備については、全国的規模の共同利用設備や昭和62年4月の「地域型研究機関（仮称）」の設立についての本会議勧告においても指摘している共同利用機器センターを、重点的に早急に整備していくことが必要である。人文・社会科学系についても、昭和63年4月の「大学等における学術諸分野の研究情報活動の推進について（要望）」のとおり、コンピュータや原資料、文献、図書コレクションとその利用のための機器やネットワークなどの整備が極めて重要である。

なお、我が国の基礎研究を限られた人的・物的資源のなかで、より一層有効に推進していくためには、大学等と各省庁の研究機関の基礎研究に関する研究設備の相互利用とそれを通しての研究者の相互交流を推奨する方策を採るべきである。その際、国の手続きを一段と簡素化、迅速化するなど制度の改善を図る必要がある。

総会中の自由討議—人間の科学—

今回総会の第2日目の午後には、1時から3時間にわたって「総会中の自由討議」が行われた。これは、会員のための一種の勉強会で、総会行事の一環として、従来から、行われてきたものである。今回は、第14期活動計画の中で、第14期の具体的審議課題の一つとして掲げられている「人間の科学」という課題を取り上げて行われた。

自由討議は、福場博保第6部会員の司会のもとに、まず、近藤次郎会長から、「世界人口が50億を超え、来世紀には100億を突破する。人類の繁栄が人類の破滅を招くおそれがある。今総会での人間の科学特別委員会の設置は、新聞・テレビでも報道されたので、早速一般市民や研究者からも好意的な反響があった。人間のため科学のあり方を考えることは学術会議にふさわしい命題である」と考える。」との開会の辞があり、続いて、下記の4人の会員による意見発表が行われ、さらにこれらの意見発表に対する質疑応答等がなされ、最後に、中山和久第2部会員の閉会の辞があり、終了した。なお、この討議の内容は、後日、日学双書として出版される予定である。

4会員による意見発表の要旨は、以下のとおりであった。

1. 人間と「人間の科学」

肥田野 直 (第1部会員・心理学)

「人間の科学」を検討する際に考慮すべき二つの点について提言したい。第一は人間が何を意味するかという点である。これは、個体(個人)、人間集団(社会)、人類の三つのレベルが考えられる。個人は身心の統一体であり、心は知性と感性、あるいは知情意の三つの側面をもち、自我(自己)を中心とするミクロコスモスとして把握することができよう。時間の面からは、個人は成長発達、社会は歴史、人類は進化の観点から把握することができよう。第二は人間と「人間の科学」との関係である。これは、研究対象としての人間、研究主体としての人間、及び研究目的としての人間すなわち人間のための科学という三つの立場が考えられるであろう。

2. 「人間の科学」への接近

島袋 嘉昌 (第3部会員・経営学)

「人間の科学」は、諸科学の特性を認識すると同時に相互の誤解をときほぐし、人文・社会科学と自然科学をベースとした総体としての科学を醸成し、生命と生活とを総合して考える科学をねらいとしている。いわゆる生命尊厳を抽象化して考えるだけに留めないでその内容をより具体的に解明することである。

さらに、次のような事項を検討していくべきである。

伝統的科学概念、「人間の科学」の必要性、総合科学としての「人間の科学」、科学哲学の再吟味。

3. 生体と文明とのディスクレパンシー

埴原 和郎 (第4部会員・人類学)

生物の体は本来保守的であり、したがって急激な進化は起こりにくい。これに対して文明の発展はポジティブ・フィードバックの作用により、2次関数曲線を描いて急速に発展する。とくに最近の科学・技術の発展に伴って環境は急激な変化をとげたが、生物の進化がそれに伴って進んでいるとは言い難い。ここに文明と生体との間に大きなディスクレパンシーが生ずる理由がある。

人体について言えば、われわれの体は1万年以上前の旧

石器時代の環境に適応している。しかし現実の環境は旧石器時代とは著しく異なり、人体の適応の限度を超えている。これは文明の発展が必ずしも望ましい方向に進んではいないという一例であろう。

4. 「人間の科学」の背後にあるもの

井口 潔 (第7部会員・外科系科学)

科学を真に人類の福祉に役立てようとするときに必要なことの中には、科学を行う心と科学を活用する心とは区別しておかなければならないということではなからうか。ではそのときの判断の基準はどこに求めたらよいのか。私は「人間存在の理法」とも言うべき概念に據り処をおきたいと思う。

30億年の生命の歴史の中で精神をもつ生物として人間が出現し、この人間は、ほんの300年位前から科学の道を歩みはじめたばかりである。しかし宇宙の秩序の本質は、ある面は知性によって把握され、ある面は感性によって生得的に人間の脳に刻みこまれているはずと私は考える。我々は「人間存在の理法」を沈思して、それとの調和の下に人類の繁栄の道を探求して行かねばならぬと思う。

平成元年度における学術研究集会等開催予定

本会議では、毎年、本会議の登録学術研究団体及び広報協力学術団体に依頼して、これらの各団体の翌年度における学術研究集会等の開催予定について調査を行い、その結果を、「学術研究集会等開催予定一覧」としてとりまとめている。平成元年度分については、昨年11月に調査を実施したが、調査を依頼した学術研究団体数は956団体で、回答のあった団体数は、876団体であった。

このたび、その結果がとりまとめられたが、それによると、回答のあった団体からもたらされた開催予定の学術研究集会等の数は、延べ約3,300に達している。その分野ごとの内訳は次のようになっている。

部 別	学術研究集会等数
第1部 (文学, 哲学, 教育学・心理学・社会学, 史学)	701
第2部 (法学, 政治学)	111
第3部 (経済学, 商学・経営学)	269
第4部 (理学)	463
第5部 (工学)	708
第6部 (農学)	326
第7部 (医学, 歯学, 薬学)	714
計	3,292

注：学術研究団体の関係する部が複数の場合には、当該集会等を関係する部にそれぞれ計上したので、延べ数である。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話 03(403)6291

会 員 異 動

＜新入会員＞

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ ②材料)
齊藤 康典	筑波大・下田臨海・ 実験センター	〒415 下田市5-10-1	①ホヤの自己認識機構 ②イタボヤ
松元 隆夫	日立基礎研	〒185 国分寺市東恋ヶ窪 1-280	①構造生物学
佐藤 英二	浜松医大・生化Ⅱ	〒431-31 浜松市半田町3600	①ツメガエルの発生 ②アフリカツメガエル
藤原 裕子	三菱化成生命研・哺乳 乳発生	〒194 町田市南大谷11	①初期発生の遺伝子発現 機構 ②マウス
深町 博史	東大・理・動物	〒113 文京区本郷7-3-1	①上皮細胞の増殖分化の 制御機構 ②マウス, ラット, ヒト
鳥山 優	静岡大・教養・生物	〒422 静岡市大谷836	①ウニ胚中心体のタンパ クの機能 ②ウニ
山田 一実	東大・理・動物	〒113 文京区本郷7-3-1	①ウニ胚アリルスルファタ ーゼ遺伝子の発現機構 ②ウニ
小阪 淳	基生研・形態形成	〒444 岡崎市明大寺町字 西郷中38	①色素上皮細胞の分化転換 機構 ②ニワトリ
渋谷 徹	食品薬品安全センター	〒257 秦野市落合729-5	①始原生殖細胞 ②マウス
松本 緑	東工大・理・生命理学	〒152 目黒区大岡山2-12-1	①精子形成・受精 ②マウス, ヒトデ
森 千里	京大・医・解剖Ⅲ	〒606 京都市左京区 吉田近衛町	①哺乳類の初期発生にお ける成長因子の発現 ②マウス, ラット, ヒト
沢田佳一郎	基生研	〒444 岡崎市明大寺町 西郷中38	①網膜色素上皮細胞の分 化転換機構 ②ニワトリ

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ ②材料)
谷口 実	細胞生理化学研	〒965 会津若松市東栄町 1-34	①細胞分化, 形態形成 ②シ ョ ウ ジ ョ ウ バ エ, ザ リ ガ ニ
落合 廣	北大・理・生物	〒060 札幌市北区北10条西 8丁目	①細胞間接着と細胞分化 ②キイロタマホコリカビ
野村 彰	京大・理・動物	〒606 京都市左京区北白川 追分町	①受精卵の細胞周期 ②イトマキヒトデ
山下 菊治	徳島大・歯・口腔解剖Ⅱ	〒770 徳島市蔵本町3-18-15	①骨芽細胞の起原と分化 ②ラット, マウス
内山 英穂	東大・理・動物	〒113 文京区本郷7-3-1	①神経分化 ②C. elegans
三木 清史	名大・農・生化制御	〒464-01名古屋市中千種区 不老町	①細胞分化, 形態形成 ②テラトカルシノーマ
高橋 雄	東大・理・動物	〒113 文京区本郷7-3-1	①唾液腺原基の形態形成 ②マウス
長沢 康男	東大・薬・微生物	〒113 文京区本郷7-3-1	①発生におけるレクチン の機能 ②センチニクバエ
阪井 浩	東大・理・物理	〒113 文京区本郷7-3-1	①筋肉の分子生物学 ②シ ョ ウ ジ ョ ウ バ エ
伊藤 啓	東大・理・物理	〒113 文京区本郷7-3-1	①神経発生 ②キイロシ ョ ウ ジ ョ ウ バ エ
山田 俊平	東京医歯大・歯 顎研発生	〒113 文京区湯島1-5-45	①発生, ガンと遺伝子発現 ②マウス
川上 厚志	名大・理・生物	〒464-01名古屋市中千種区 不老町	①昆虫の変態に関わる遺 伝子の発現 ②カイコ
佐藤 元治	愛媛大・理・生物	〒790 松山市文京町2-5	①初期卵割と細胞分化の 関係 ②マウス
若松 義雄	名大・理・分子生物	〒464 名古屋市中千種区 不老町	①N-myc 遺伝子の発現 と機能 ②ニワトリ

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ ②材料)
中藤 博志	都立大・理・生物	〒158 世田谷区深沢2-1-1	①タンパクの生合成機構 ②カイコ
日吉 裕展	熊大・理・生物	〒860 熊本市黒髪2-39-1	①精子形成における核タンパクの解析 ②アカハライモリ, アフリカツメガエル
三輪 陽子	理研・筑波ライフサイエンスセンター・分子腫瘍	〒305 つくば市高野台3-1-1	①テラトカルシノーマの分化 ②PCC3
北島 健	東大・理・生化	〒113 文京区本郷7-3-1	①初期発生における複合糖質の関与 ②ニジマス, メダカ, カエル
木谷 裕	理研・筑波ライフサイエンスセンター	〒305 つくば市高野台3-1-1	①神経細胞の増殖・分化 ②マウス
子林 孝司	田辺製薬・安全研	〒552 大阪市淀川区加島3-16-89	①イオンチャネルと発生 ②マウス, ラット, ニワトリ
高橋 直樹	名大・理・分子生物	〒464 名古屋市千種区不老町	①遺伝子発現調節 ②マウス, ヒト
野地 澄晴	岡山大・歯・口腔生化	〒700 岡山市鹿田町2-5-1	①手と歯の発生 ②ニワトリ, マウス
浜崎 浩子	千葉大・医・高次機能研	〒280 千葉市亥鼻1-8-1	①細胞間相互作用 ②哺乳動物細胞
小野 謙一	ヘキストジャパン 医薬研・細胞生物	〒350 川越市南台3-1-2	①パターン形成とモザイク ②カイコ
藤原 晴彦	東大・理・動物	〒113 文京区本郷7-3-1	①細胞接着 ②マウス, ニワトリ
嶋村 健児	京大・理・生物物理	〒606 京都市左京区北白川迫分町	①カドヘリン ②ハエ
平野 伸二	京大・理・生物物理	〒606 京都市左京区北白川迫分町	①キメラによる発生解析 ②マウス
吉木 淳	理研・ライフサイエンス研	〒305 つくば市高野台3-1-1	

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ ②材料)
小出水圭子	東京理大・理工・応用 生物	〒278 野田市山崎2641	①細胞とマトリックスの 相互作用 ②ウサギ角膜内皮
小久保博樹	東京理大・理工・応用 生物	〒278 野田市山崎2641	①網膜の分化とヒストン ②ニワトリ
土田 一人	東京理大・理工・応用 生物	〒278 野田市山崎2641	①真核生物の遺伝子発現 制御 ②ニワトリ胚色素上皮
小野里 坦	養殖研	〒519-04 三重県度会郡 玉城町昼田224-1	①染色体操作 ②魚類(サケ, コイ)
矢内 信昭	東北大・抗酸研 細胞生物	〒980 仙台市青葉区 星陵町4-1	①血球分化 ②マウス
里村 一人	徳島大・歯・口腔外科 I	〒770 徳島市蔵本町 3-18-15	①細胞分化 ②ヒト, マウス, ラット
熊倉 雅彦	新潟大・理・生物	〒950-21 新潟市五十嵐 2の町8050	①生殖腺の発生分化 ②クロサンショウウオ, イモリ
久野 慎一	早大・教育・理学	〒169 新宿区西早稲田 1-6-1	①ウニ骨片形成の分化機 構 ②ウニ

<所属・住所変更>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
山本 好久	日本たばこ産業・医薬研	〒 227 横浜市緑区梅ヶ丘6-2
谷村 明彦	東日本学園大・歯・薬理	〒061-02 石狩郡当別町金沢1757
大石 茂子	三重大・生物資源	〒 514 津市江戸橋2-80
崎山 妙子	四天王寺国際仏教大	〒 583 羽曳野市学園前3-2-1
刀祢 重信	和歌山県医大・生化	〒 640 和歌山市九番丁27
八巻 敏雄		〒 188 田無市緑町3-6-36
勝木 元也	東海大・医・DNA生物	〒259-11 伊勢原市望星台
小向 正恭	日本医大・薬理	〒 113 文京区千駄木1-1-3
横山 岳	東京農工大・農・蚕糸生物	〒 183 府中市幸町3-5-8
上田 泰次 (復活)	東京理大・理工・応用生物	〒 278 野田市山崎2641
倉淵 真吾	日本歯大・解剖Ⅱ	〒 102 千代田区富士見1-9-20
竹内 隆	三菱化成生命研・発生	〒 194 町田市南大谷11
森中 敏行	大阪府立池田北高	〒 563 池田市伏尾台2-12
石川 優	椋山女学園大・人間関係	〒470-01 愛知郡日進町岩崎字竹之山37-234
大西 英爾	岡山理大・基礎理学	〒 700 岡山市理大町1-1
赤坂 甲治	広島大・理	〒 730 広島市中区東千田町1-1-89
金谷 一司	日本抗体研	〒 370 高崎市栄町17-6
小野 裕之	東北大・農・農芸化学	〒 980 仙台市堤通雨宮町1-1
浜田 新七	滋賀医大・病理Ⅰ	〒520-21 大津市瀬田月輪町
永山 正雄	東海大・医・神経内科	〒259-11 伊勢原市望星台
中山 広樹	阪大・医・病理	〒 530 大阪市北区中之島4-3-57
岡本 光正	名大・理・分子生物	〒 464 名古屋市千種区不老町
日野 晶也	神奈川大・理・応用生物	〒259-12 平塚市土屋2946
鈴木 一好	NKKバイオ開発センター	〒 210 川崎市川崎区南渡田町1-1
佐藤 元治	福山明王台高	〒 720 福山市瀬戸町長和289-1

<退 会>

佐川 輝高, 長谷川頭太郎, 熊沢 秀雄, 生熊 繁, 米村 重信, 稻瀬 正夫, 中村 経紀
清水 慶子, 五島 喜与太, 小田 裕子, 真弓 忠範, 片柳 滋

〔賛助会員〕

- | | |
|---|--|
| 組織培養はパイレックスコーニングの岩城硝子㈱ | 〒100 千代田区丸の内3-2-3
TEL 03-214-7401 |
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書㈱ | 〒211 川崎市幸区小倉610-1-506
TEL 044-533-0470 |
| ㈱武田薬品工業中央研究所 | 〒532 大阪市淀川区十三本町2-17-85
TEL 06-300-6835 |
| 試薬・機器の御用命は名古屋片山化学㈱まで | 〒460 名古屋市中区丸の内3-11-4
TEL 052-971-6531 |
| 日製産業株式会社 | 〒453 名古屋市中村区名駅4-6-18
(名古屋ビル内)
TEL 052-583-5846 |
| バイオテクノロジーで未来をひらく㈱バイオ科学研究所 | 〒990 山形市城西町5-34-5
TEL 0236-44-5030 |
| 発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館 | 〒102 千代田区九段南4-3-12
TEL 03-262-5256 |
| 藤本理化 | 〒113 文京区向ヶ丘2-34-12
TEL 03-827-8151 |
| 最良の選択ファルコン組織培養器具ベクトン・ディッキンソン・オーバーシーズ Inc. | 〒107 港区赤坂8-5-84 島藤ビル
TEL 03-403-9991 |
| 三菱化成生命科学研究所 | 〒194 町田市南大谷11
TEL 0427-24-6226 |
| マウス・モノクローナル抗体(アロ抗体)は明治乳業㈱ | 〒104 中央区京橋2-3-6
TEL 03-271-4333 |
| 試薬及び理化学機器販売理科研㈱ | 〒463 名古屋市守山区元郷2-107
TEL 052-798-6151 |
| 科学の技術に奉仕する理工学社 | 〒113 文京区本駒込5-9-10
TEL 03-928-5211 |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬㈱ | 〒606 京都市左京区北白川西伊織町25
TEL 075-721-0491 |

(50音順)

学術研究用人工海水

Jamarin®

■特 長

1. 各元素の含量は外洋水の分析値による。
2. 完全に溶解する。
3. 分割使用できる。
4. 水質は極めて安定で自然海水のようなバラツキがない。
5. 経時変化しない。
6. 研究の目的により色々の種類がある。
7. 殆んどすべての海の生物に使用できる。

■主要元素の含量 (g/l)

Cl 16.947	Na 9.311	Mg 1.137
S 0.774	Ca 0.395	K 0.344

■種 類

1. JAMARIN U(一般用)
極めて易溶、Triple strengthまで溶解可能。
ウニ囊胚形成率 *Anthocidaris crassispina*...98%
2. JAMARIN S(滅菌用)
オートクレーヴィングにより濁りや、沈澱を生じない。
ウニ囊胚形成率 *Anthocidaris crassispina*...96.3%
3. その他のJamarin
Ca-free JAMARIN
Ca, Mg-free JAMARIN
Sulfate-free JAMARIN
4. My Sea
ポリ袋入り粉剤だけの人工海水です。実験動物の飼育にお使い下さい。

■価 格 (送料別)

	20ℓ用	5 ℓ用	2 ℓ用
Jamarin S	2,000	1,000	
Jamarin U	1,600	800	
Ca-free Jamarin		1,500	750
Ca, Mg-free Jamarin		1,500	750
Sulfate-free Jamarin		1,500	750
My Sea	25ℓ用 1,200	(10個単位でお願いします)	

お問合わせ、ご注文は直接下記へお願いします。

ジャマリン ラボラトリー

〒536 大阪市城東区鳴野西 2 丁目11番 5 号 電話 大阪 (06) 968-3154

■文 献

1. Jamarin U: Katow, H. (1986) Behavior of sea urchin primary mesenchyme cells in artificial extracellular matrices. *Exp. Cell Res.* 162: 401-410.
2. Jamarin S: Umezawa, H., Okami, Y., Kurasawa, S., Ohnuki, T., Ishizuka, M., Takeuchi, T., Shio, T. and Yugari, Y. (1983) Marinactan, antitumor polysaccharide produced by marine bacteria. *J. Antibiot.* 36: 471-477.
3. Ca-free Jamarin: Shirai, H., Ikegami, S., Kanatani, H. and Mohri, H. (1982) Regulation of sperm motility in starfish. I. Inhibition of movement. *Develop., Growth and Differ.* 24: 419-428.
4. Ca, Mg-free Jamarin: Mitsunaga, K., Fujino, Y. and Yasumasu, I. (1987) Provable role of Allylisothiocyanate-sensitive H⁺K⁺ATPase in spicule calcification in embryos of the sea urchin, *Hemicentrotus pulcherrimus*. *Develop., Growth and Differ.* 29: 57-70.
5. Sulfate-free Jamarin: Yamaguchi, M. and Kinoshita, S. (1985) Polysaccharides sulfated at the time of gastrulation in embryos of the sea urchin *Clypeaster japonicus*. *Exp. Cell Res.* 159: 353-365.
6. My Sea: Lutz, D.A., Inoué, S. (1986) Techniques for observing living gametes and embryos. In *Methods in Cell Biology* (T. E. Schroeder, ed.), Vol. 27, p. 91. Academic Press.

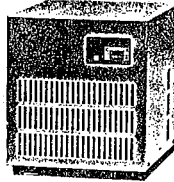
生物研究関連機器

AQUA

■ 加熱冷却ユニット

クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120 l	¥196,000
HC101A-3	100W	300W	160 l	¥207,000
HC131A-5	130W	500W	260 l	¥220,000
HC201A-5	200W	500W	360 l	¥237,000
HC301A-5	300W	500W	670 l	¥298,000
HC401A-5	400W	500W	1000 l	¥335,000



■ 温度コントローラー

温度を精度良く一定に保つことができます。循環ポンプなどの使用に便利な予備コンセント付き。警報付きなど各種あります。



形式	設定方式	温度指示	温度目盛	制御方式	価格
TA200※	アナログ	なし	-50 ~ 50℃	比例式	¥26,000
TA201-S	アナログ	全指示	0 ~ 50℃	比例式	¥38,000
TD202※	デジタル	偏差指示	0 ~ 99.9℃	比例式	¥29,000
TA300-S	アナログ	なし	0 ~ 50℃	三位置	¥37,000
TA301-S	アナログ	全指示	0 ~ 50℃	三位置	¥44,000
TD302-S	デジタル	偏差指示	0 ~ 99.9℃	三位置	¥48,000
TD303-S	デジタル	全指示	0 ~ 99.9℃	三位置	¥58,000

注) 測温抵抗体と併せてご使用下さい。

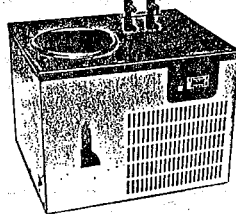
※印はサーミスター測温体 ¥1,800(空気用) ¥3,000(水用)

無印は白金測温体シース材質 SUS304 ¥7,900 Ti ¥12,000

■ 低温恒温循環水槽

実験台上でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をそなえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

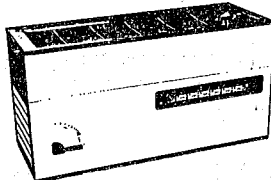
形式: CT 65-300-S
使用温度範囲: 0 ~ 50℃
温度調節精度: ±0.1℃
外形寸法: W420×D330×H340
槽内寸法: φ153×H187
冷凍機: 65W
ヒーター: 300W
価格: ¥250,000



■ 温度勾配装置 (ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。振とう装置付きもあります。

形式: TGW-3(三連)/TGW-6(六連)
使用温度範囲: 0 ~ 50℃
温度調節精度: ±0.05 ~ ±0.1℃
槽内寸法: 150×260×150×3/×6
冷凍機: 200W/300W
ヒーター: 90W×3/×6
価格: ¥620,000/¥780,000



■ 恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微妙にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので可動性に富みどこでも使えます。

形式: CTC 421

外形寸法: 407×193×H298

庫内寸法: 246×122×H200

コントロー: デジタル設定、デジタル表示

価格: ¥78,900 (蓄冷体-15℃付)



■ 恒温ボックス

四面全面加熱冷却の新方式による高性能の恒温ボックス。庫内は精度よく一定温度に保たれ霜が付かず乾燥しません。

形式: CTA 452-1

外形寸法: W700×D460×H440

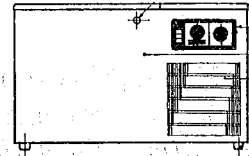
槽内寸法: φ380×H350

温度範囲: 10 ~ 40℃

冷凍機: 65W ヒーター: 100W

蛍光灯: 32W タイマー: 24h

価格: ¥350,000



■ ポータブル インキュベーター

小型軽量、持ち運びが容易です。庫内は精度よく一定温度に保たれます。冷凍機とヒーターを備えていますので庫内を低温(0℃)から高温(40℃)まで任意の温度に設定することができます。電源は交流・直流両用です。車載用として搬送、野外での使用の他研究室内で利用することができます。

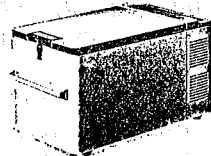
透明蓋付もあります。

形式: CTM 305

外形寸法: 631×360×H373

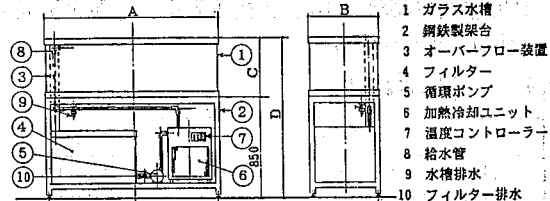
槽内寸法: 350×280×H260

価格: ¥187,000(12V用)

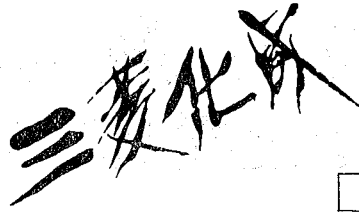


■ 水生生物環境調節装置

各種の魚介類が飼育できます。各機器はユニット形式を採用。点検管理が容易です。水槽、加熱冷却ユニット、温度コントローラー、フィルター、循環ポンプなどは全て海水仕様です。



形式	水 槽	クーラー	ヒーター	価 格
ARA 9-5-101A-5	900×500×450	100W	500W	¥459,000
ARA 9-6-131A-5	900×600×600	130W	500W	¥663,000
ARA12-5-131A-5	1,200×500×500	130W	500W	¥678,000
ARA12-6-201A-5	1,200×600×600	200W	500W	¥858,000
ARA15-6-301A-10	1,500×600×600	300W	1,000W	¥1,005,000
ARA15-7-401A-10	1,500×750×750	400W	1,000W	¥1,297,000
ARA18-6-301A-10	1,800×600×600	300W	1,000W	¥1,107,000
ARA18-7-401A-10	1,800×750×750	400W	1,000W	¥1,475,000



なか し べ っ

中標津血清

ライフインダストリーの三菱化成が採血から汙過まで一貫国内生産
最終汙過は孔径 $0.1\mu\text{m}$ のメンブレンフィルター使用

準胎児血清

生後24時間以内で初乳を飲む前の新生仔牛から採血

新生仔牛血清

生後2週間以内の新生仔牛から採血

成牛血清

1.5才以上の牛から採血

ARMOUR血清

Armour Pharmaceutical Company (U.S.A.) 製造

胎児血清

(Rehatuin® F.S.)

仔牛血清

生後16週間以内の仔牛から採血

何れもロットチェック用サンプルを提供致します。



三菱化成工業株式会社 医薬事業部

〒100 東京都千代田区丸の内2-5-2(三菱ビル)
☎03(283)6791(直通)

大阪支店化成品部門
☎06(208)4560(直通)
東京支店化成品部門
☎03(283)6100(直通)

名古屋支店化成品部門
☎052(562)2556(直通)
九州支店化成品部門
☎092(291)8891

用途に応じ、適した培地を 自由にお選びになれます。

高圧蒸気滅菌可能な組織培養用粉末培地

ダルベッコ変法イーグル培地「ニッスイ」②
NaHCO₃・L-Gln不含、特許申請品

RPMI 1640培地「ニッスイ」②
NaHCO₃・L-Gln不含、特許申請品

イーグルMEM培地「ニッスイ」①
KM含有、NaHCO₃・L-Gln不含

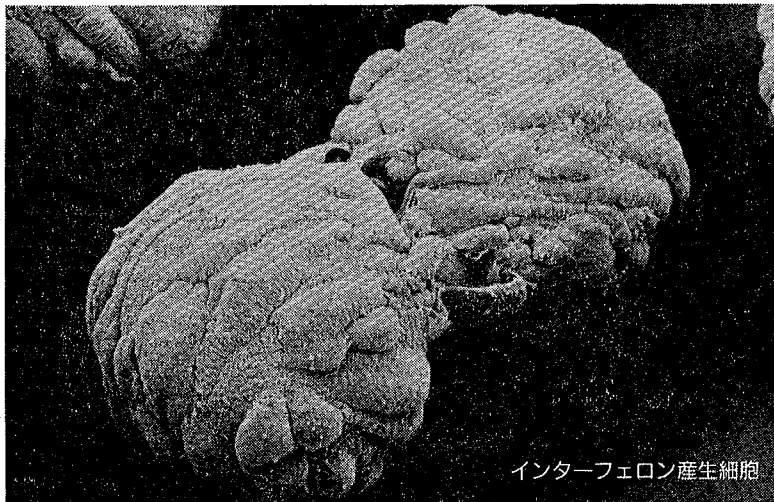
イーグルMEM培地「ニッスイ」②
KM含有、NaHCO₃・L-Gln・PR不含

イーグルMEM培地「ニッスイ」③
NaHCO₃・L-Gln・PR・KM不含

イーグルMEM培地「ニッスイ」④
浮遊培養用、KM含有、NaHCO₃・L-Gln不含

イーグルMEM培地「ニッスイ」⑤
KM含有、NaHCO₃・L-Gln・L-Arg・L-Leu・L-Met・L-Phe不含

ES培地「ニッスイ」
KM含有、NaHCO₃・L-Gln不含



インターフェロン産生細胞

ろ過滅菌型組織培養用粉末培地

イーグルMEMアミノ酸ビタミン培地「ニッスイ」

ダルベッコ変法イーグル培地「ニッスイ」①
NaHCO₃不含

199培地「ニッスイ」 NaHCO₃不含

ハムF12培地「ニッスイ」 NaHCO₃不含

RPMI 1640培地「ニッスイ」① NaHCO₃不含

無血清培地

SFM-101培地「ニッスイ」

緩衝塩類溶液

ダルベッコPBS(-)粉末「ニッスイ」

金属塩類溶液「ニッスイ」 ダルベッコPBS用

ハanks液「ニッスイ」① NaHCO₃不含

ハanks液「ニッスイ」② NaHCO₃・PR不含

アール液「ニッスイ」 NaHCO₃不含

無菌凍結乾燥グルタミン

グルタミン「ニッスイ」 無菌凍結乾燥

▶上記製品のバルク供給および上記以外の培地のご希望についてもご相談をお受けいたします。下記へお問い合わせ下さい。



製造発売元

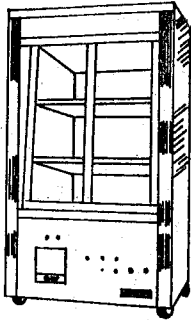
日水製薬株式会社

〒170 東京都豊島区巣鴨2-11-1 ☎03(918)8161

お問い合わせは ☎03(918)8171(直通)

NK式生物研究用機器

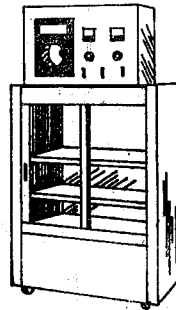
NK式電気低温恒温器(送風循環型) 高精度普及型



型式	LP-100 -S型	LP-150 -S型	LP-200 -S型
仕様			
内法 間口×奥行 ×高さ%	460×380 ×490	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	26万円	30.5万円	32万円

※その他いろいろなタイプがあります。

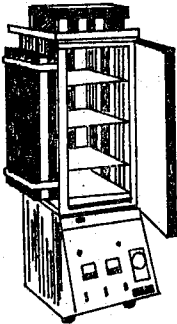
NK式プログラム電気低温恒温器(送風循環型) 四季の温度がプログラムで自在に再現できます!



型式	LP-150 -3P	LP-200 -3P	LP-300 -3P
仕様			
内法 間口×奥行 ×高さ%	460×880 ×480	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	49.8万円	53.5万円	60万円

NK式人工気象器

植物の育成、小動物(昆虫)飼育の本格派!

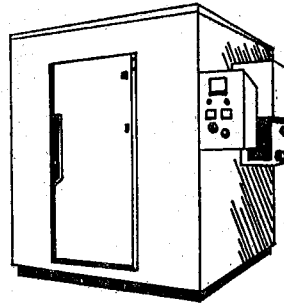


型式	LH-100 -RD型	LPH-100 -RD型	LH-100 -RDP型
仕様			
内法 間口×奥行 ×高さ%	360×350 ×680	360×350 ×680	360×350 ×680
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+10℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	温度のみ 47万円	温・湿度付 73万円	プログラム付 66万円

※その他いろいろなタイプがあります。

NK式プレハブ電気低温恒温槽

組立、移設、増設が思いのまま!



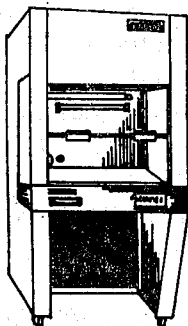
精密型

●LH型+5℃~45℃
価格1坪 1,190,000円
より各種

●LP型+18℃~45℃
価格1坪 1,290,000円
より各種

※詳細はプレハブシリーズカタログをご請求下さい。

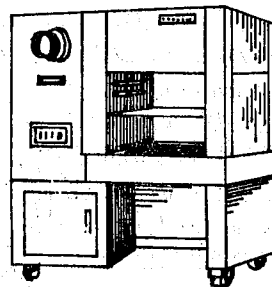
NK式クリーンベンチ(垂直層流型)



NKB-VS-850
¥780,000
NKB-VS-1300
¥880,000

NK式クリーンベンチ(垂直層流両面型)

無菌作業の能率アップに!



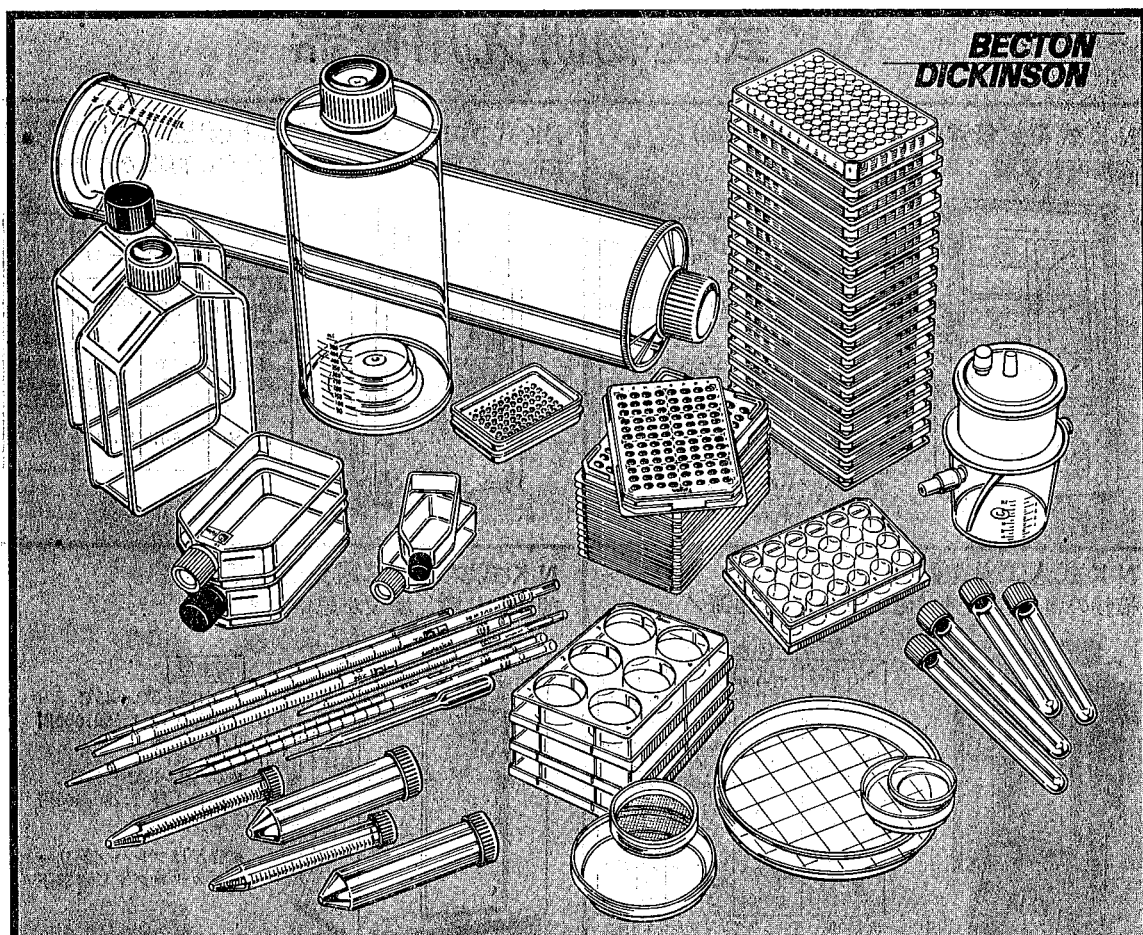
NKB-VW-850
¥1,200,000
NKB-VW-1300
¥1,500,000



株式会社 日本医化器械製作所

本社 〒550 大阪市西区江戸堀1丁目19番24号
東京営業所 〒183 東京都府中市緑町7053-4
工場 〒583 羽曳野市駒ヶ谷5番地47号

電話 大阪 06(443)0712/0
電話 府中 0423(65)3245/0
電話 羽曳野 0729(58)1919/0



1957年、組織培養器具にプラスチックの時代が始まった。 ファルコン組織培養器具

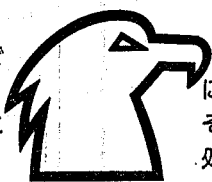
1956年11月、米国Emeryvilleの海軍微生物研究所では、人や動物の細胞をポリスチレン製ディッシュで培養することに興味を示しました。このことにいち早く着目したファルコンでは、プラスチック表面における細胞の付着や増殖について研究を進め、1957年ついに組織培養処理を施した高品質のプラスチック製ディッシュの開発に成功致しました。それは、ガラス製器具の使用にと

なうさまざまな問題点を一挙に解決し、組織培養の分野に大きな前進をもたらしました。

そして今日まで、ファルコンの活動は、よりすぐれた組織培養器具を開発することに集中しました。

その成果として、最近ではより高度な表面処理を施したプライマリア組織培養器具をお届けすることもできました。

組織培養の進歩とともに、ファルコンは常に新しい可能性をもとめ続けます。



Falcon

輸入販売元

日本ベクトン・ディッキンソン株式会社
Nippon Becton Dickinson Co., Ltd.

〒107 東京都港区赤坂8-5-34 島藤ビル TEL. 03(403)9991(代)

●B-D、ファルコン、Falcon、プライマリアはベクトン・ディッキンソン アンド カンパニーの商標です。 ●Becton Dickinson Labwareはベクトン・ディッキンソン アンド カンパニーの事業部です。

製造元



Becton Dickinson Labware

ベクトン・ディッキンソン ラブウェア事業部

Division of Becton Dickinson and Company

新刊!! 哺乳動物によるバイオテクノロジー!

マウスのテラトーマ

— EC細胞による哺乳動物の実験発生学 —

A5判・296頁
定価 3800 円
送料 300 円

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説。医学・生物学・薬学など発生学、遺伝学に関心を持つ方がたの絶好の参考書です。

国立遺伝学研究所 森脇和郎 / 序
前国立遺伝学研究所 野口武彦 / 編集
鹿児島大学 教授 村松 喬

哺乳動物の初期発生

— 基礎理論と実験法 —

B5判・480頁
定価 12000 円
送料 400 円

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してある。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

岡山大学 妹尾左知丸 三菱化成生命研 加藤淑裕
京都大学 入 谷 明 慶応義塾大学 鈴木秋悦
東京大学 館 郷 — 編 集 —

体細胞遺伝学

A5判・720頁
定価 9800 円
送料 400 円

HVJ による細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

東北大学 山根 績 大阪大学 岡田善雄 / 編集
前金沢大学 堀川正克 東京大学 黒木登志夫

理工学社 〒113 東京都文京区本駒込5-9-10 振替東京1-34676 電話03(828)5211(代) <図書目録進呈>

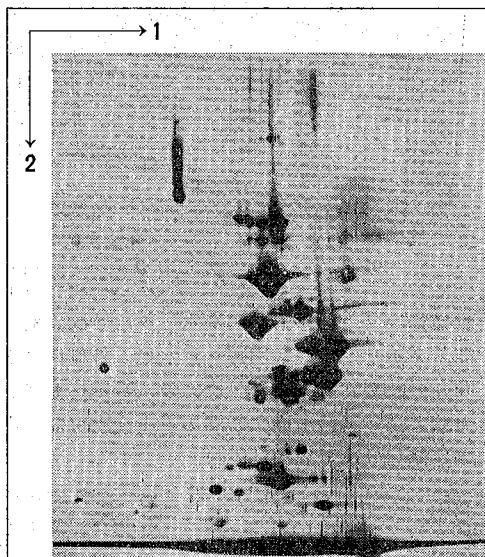
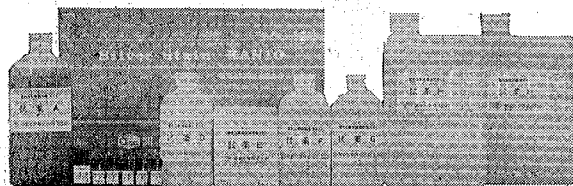
Silver Stain KANTO

電気泳動用銀染色キット

シルバーステインKANTOは、蛋白・核酸を高感度で簡単に検出できます。

シルバーステインKANTOは、現像が緩やかにすすむように調製されています。現像停止のポイントを判断しやすく美しい染色像が得られます。

Cat.No.57650 **Silver Stain KANTO**
電気泳動用銀染色キット・シルバーステインKANTO
スラブゲル (140mm×140mm×1.0mm) 25枚分



O'Farrell 2D-electrophoresis (一次元目はNEPHGE(1)、二次元目はSDS/PAGE(2))。試料は、筋蛋白 5 μ g。

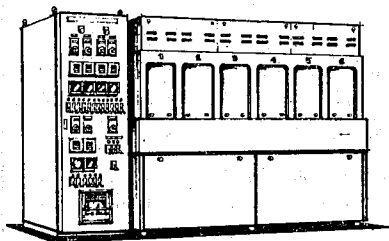
関東化学株式会社 試薬事業本部

103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 03(663)7631
541 大阪市東区瓦町3丁目1番地 06(222)2796

Aquarex

研究に應える設備です

研究者のニーズにどう対応できるか——できるかぎりの努力をするべきだと考えています。多機種の内から一部製品をご案内いたします。



低温水棲生物生理実験装置

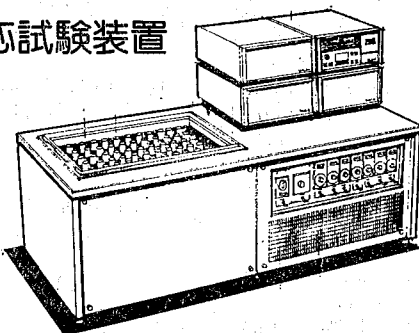
低温水棲生物の生理実験用装置。極寒冷地の植物性・動物性プランクトン、ウニ、ヒトデ、ベントス等に最適。水槽・温度調節装置・照明装置を装備。6槽分離独立。温度制御範囲は $-5^{\circ}\text{C} \sim +30^{\circ}\text{C}$ 。照明装置（クールレイランプ、熱線吸収ガラス使用。高照度30,000 Lux。照度・照明時間の自由設定可能。

TG6-1500

卵稚仔温度反応試験装置

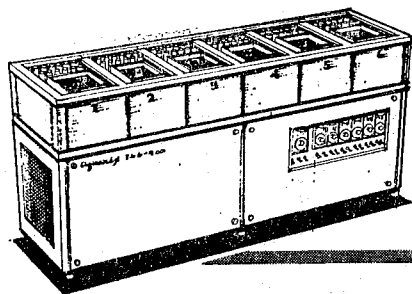
水生生物の卵・稚仔の環境温度に対する反応研究用に最適の装置。試験管88本により環境温度勾配を広範囲に一定保持。実験対象の各部位置温度を時間経過に従って記録。照度も自由に選べる照明装置。小型多点温度記録装置が特長です。

TG11-8



卵稚仔温度反応試験装置用馴致装置

卵稚仔温度反応試験装置（TG11-8）の馴致用装置。本装置は6槽に分離独立。水槽ごとに温度設定が可能。各槽ごとの試験管挿入可能。卵稚仔を反応装置（TG11-8）に入れる前準備に、また分類作業に最適。温度制御は正確・広範囲に温度設定が可能。

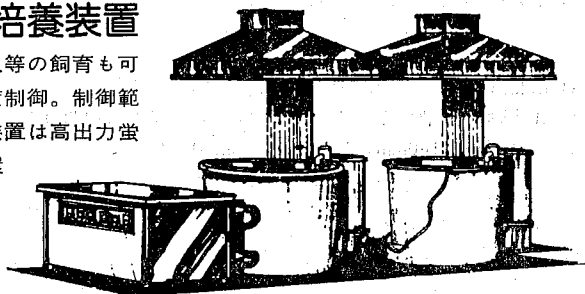


TG6-300

プランクトン培養装置

動植物性プランクトンの海水培養用装置。幼魚・稚魚等の飼育も可能。2ポリエチレン円形2重水槽。外側槽による温度制御。制御範囲 $5 \sim 35^{\circ}\text{C}$ 。ヒーター・クーラー自動切換式。照明装置は高出力蛍光灯。光量調節・照明時間の自由変更可能。海水循環酸素補給・水質維持装置付。

AR11D-1500



株式会社 **アクアレックス**

〒143 東京都大田区中央2丁目2番6号

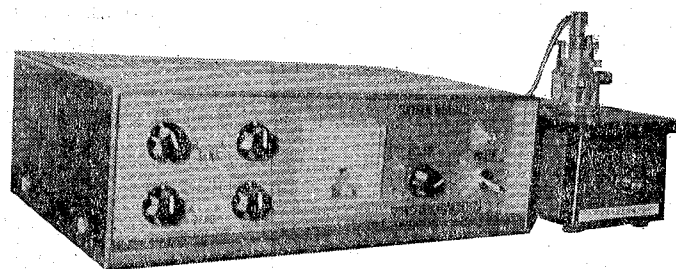
お問合せ

ご相談はお気軽に ☎ 東京 03(778)0202

酸素電極による呼吸測定装置

(溶存酸素による呼吸測定装置)

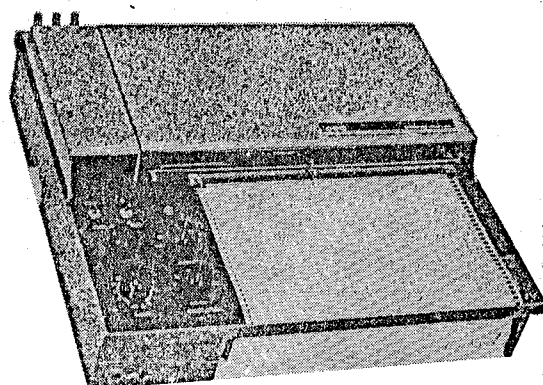
ミトコンダリア及び細胞懸濁液の溶存酸素減少による呼吸率の測定は、古くから行なわれて来ました。懸濁液を入れる密封容器の取扱いはかなりむずかしく、その容器の変更も困難でしたが、この容器は1.5ml~5mlまでの容量の変更が容易であり、試薬を懸濁液に投入したり、懸濁液の一部を密封状態のまま取り出す事が出来ます。セルはウォータージャケットがついていますので精密な温度コントロールが出来ます。フルスケール10mVの記録計に接続しても御使用できます。



S-I 溶存酸素測定装置

記録計

1mV~10V
フルスケール全幅移動可能
400K Ω ~無限大 (レンジによる)
250mm幅
6段変速 (標準最少2.5mm/min)
AC100V 50~60Hz



 信誠理化学器械株式会社

〒112 東京都文京区後楽2-21-14

TEL (03) 815-3066代

FAX (03) 815-3231

あらゆる研究分野に対応できる多様なシステム。
観察から撮影まで、可能な限り自動化を実現。



全自動写真撮影装置を内蔵。今までにない多様なシステム性と操作性で画像解析、分光測光などの将来的研究ニーズにも充分対応。電動6ヶ穴レボルバー、1×~100×まで完全ケーラー照明、写真撮影レンズ4種類内蔵、フィルム面と同じ像が観察できる一眼レフ式ファインダー、視野数26.5φの超広視野など随所に最先端のメカニズムが生きています。しかも、35mm2台+大版1台+TVカメラ1台計4台を同時装着できる3-WAYカメラ。鮮明な像を観察、確実に記録できます。

VANOX-S series

最高級写真顕微鏡オートタイプ

●電動6ヶ穴レボルバー ●対物レンズに連動した照明系の切換えは調光・開口絞り・視野絞りを自動完了 ●低倍率のピント合わせ ●カメラ選択 ●撮影レンズの切換えなどを自動化 (マニュアル操作も可)

VANOX-T series

最高級写真顕微鏡スタンダードタイプ

●電動6ヶ穴レボルバー ●NDフィルター11段階切換えによる自由調光 ●ボタンによるカメラ選択 ●撮影レンズ4種内蔵 (ターレット切換え)

未知をひらく光学技術

〈仕様〉●超広視野接眼 (視野数26.5φ) ●鏡筒長定常装置付 ●6ヶ穴電動レボルバー ●右下共軸ハンドル大型ステージ ●各種フィルター内蔵 ●撮影レンズ4種類内蔵 ●全自動写真撮影装置内蔵 ●35mmハーフサイズ撮影、スケール写し込み可 (オプション)

VANOX-S/VANOX-T

最高級写真顕微鏡システム

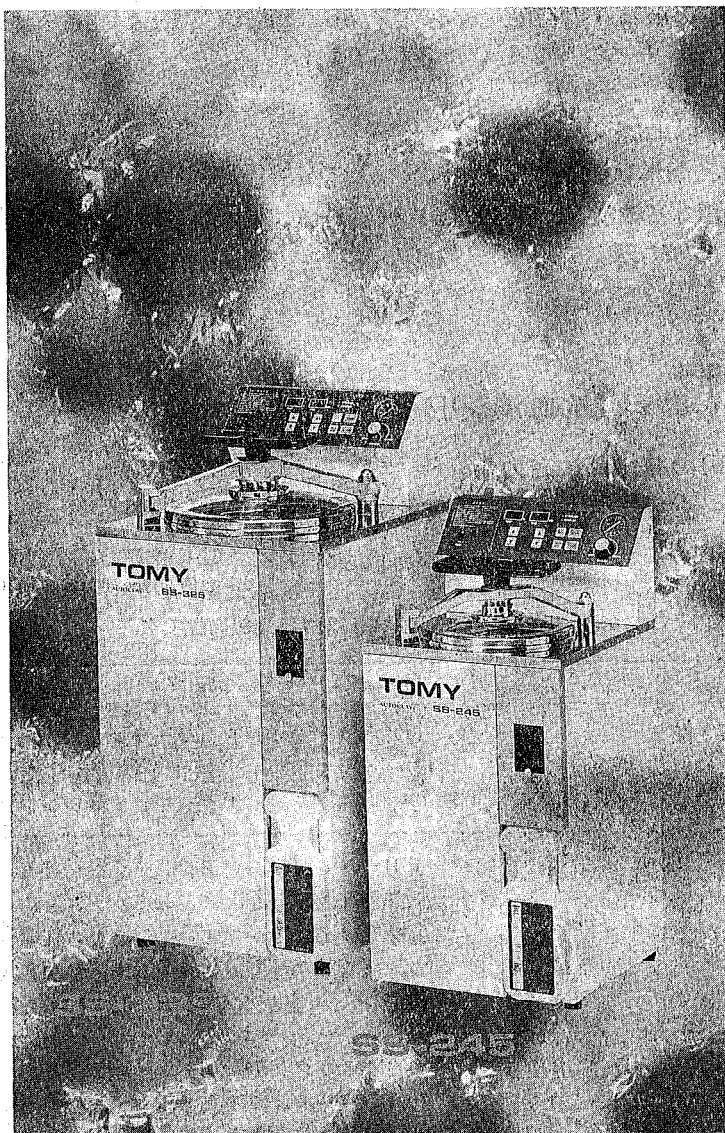
オリンパス光学工業株式会社
オリンパス販売株式会社
総代理店

(株)三光オリンパス

DIGITAL

TOMY

かんたんデジタル
マイクロプロセッサコントロール



デジタル制御オートクレーブ

- 電源ONにて常用値の設定が自動的に行われます。あとはスタートスイッチを押すだけのかんたんデジタル機構。
- 空たき防止、滅菌不良防止、誤操作防止機構など安全装置を満載の安全優先設計。
- 最低使用滅菌温度は60℃、各種条件に対応する広域高精度温度管理を実現しました。
- 容量等仕様のことなる4機種をシリーズ化しました。
- SS-245 缶体容量22ℓ
- SS-246 缶体容量53ℓ
- SS-247 缶体容量18ℓ
- SS-248 缶体容量45ℓ

株式会社・トミー精工

本社 03-576-3111
仙台 022-73-0033
つくば 0297-6-0081
神奈川 0462-23-5101
大阪 06-655-0333

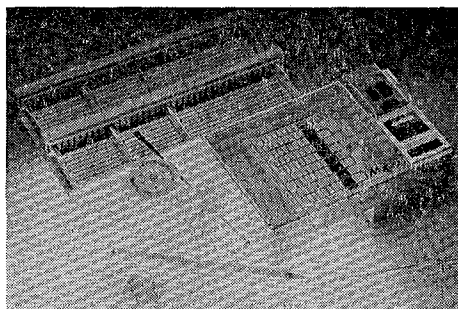
Mupid-2.

ミニゲル電気泳動システム《ミューピッド-2》

ミューピッド-2は、泳動槽・パワーサプライ・ゲルメーカーセットを組み合わせたコンパクトな電気泳動システムです。核酸・タンパク質など様々な泳動が可能です。

- お一人に一台以上。
- 安全、軽量、簡単な操作。
- 学生の実習用など教材としても最適。

※部品の別売もしております。

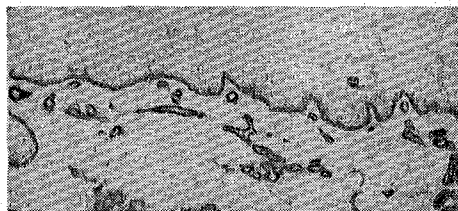


超安価 **¥29,800**

(PAGE調製用カバー、電源及びゲルメーカーセットを含む)

Didets® (抗血清シリーズ)

- 全血清(留分)の凍結品、高力価。
- 細胞骨格タンパク質、ホルモン、酵素等に豊富な商品群。



染色例: Type IV Collagen (Bovine Skin)

※Didetsは、(株)アドバンスが製造した免疫研究用試薬に対する登録商標です。

〔シリーズ品〕	〔抗原〕	は新製品
細胞骨格タンパク質	(ウシ)タイプI~IVコラーゲン、(ヒト)タイプIV~Vコラーゲン、(ラット)タイプIコラーゲン、ラミニン、フィブロンネクチン、アクチン、ミオシン、チューブリン	
ホルモン	LH-β、HCG、プロラクチン、ACTH、α-MSH、β-MSH、α-エンドルフィン、β-エンドルフィン、メチオニン・エンケファリン、ソマトスタチン、サブスタンス-P、ニューロテンシン、VIP、カルシトニン、ガストリンI、S-100タンパク	
酵素	カーボニック・アンヒドラーゼ、グルタマイト・デカルボキシラーゼ、グルタマイト・デヒドロゲナーゼ、ブチル・ヨリシエステラーゼ、アルカリ・フォスファターゼ、Na ⁺ ・K ⁺ ATPase	

(免疫動物はすべてウサギです。)

※製品についての詳細は下記までお問い合わせ下さい。

製造元 **株式会社アドバンス**

〒103 東京都中央区日本橋小舟町5-7 ☎03(667)1551(代)

総販売元 **コスモ・バイオ株式会社**

〒103 東京都中央区本町4-13-5 第20中央ビル ☎03(663)0723

Ready for Use の新ブロッキング剤

ブロック エース Block Ace

Non-specific Binding を強力にブロック/そして安価!

用
途

- ELISA等のブロッキング
- 試料および標識第2抗体の希釈
- B/F分離等の洗浄
- 生理活性物質の安定化剤

特
長

1. ELISA等でバックグラウンドを低く抑えます。
2. BSA溶液をブロッキング剤として用いた場合より測定感度が上がり、かつ安価です。
3. 液状なので直ちに使用できます。
4. 加熱滅菌処理済です。

発売元



大日本製薬株式会社

ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94

TEL 大阪(06)386-2164 (代表)

製造元



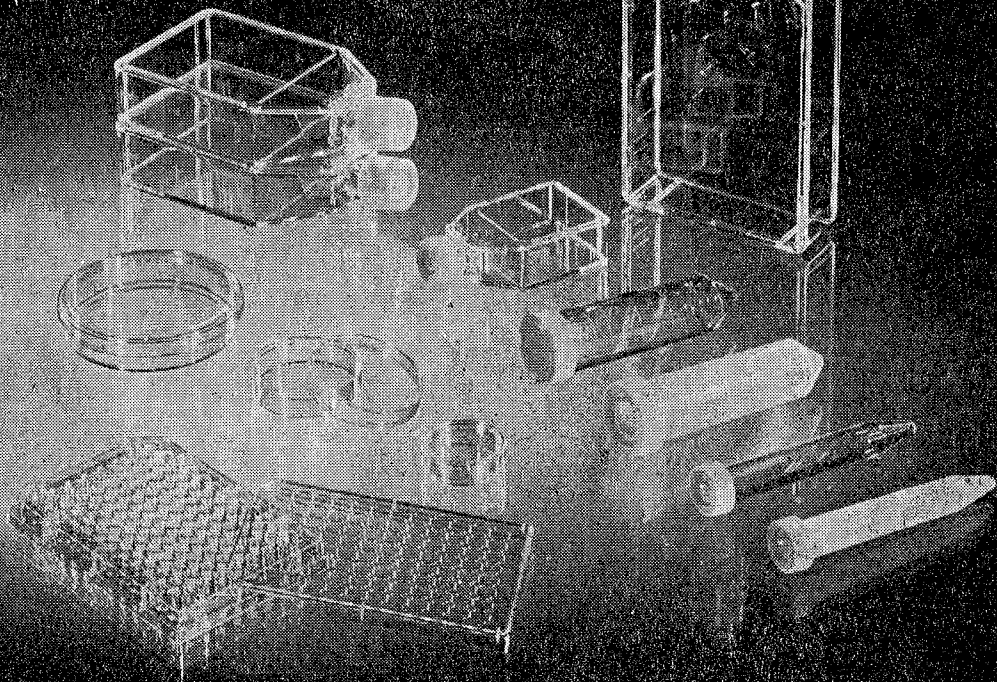
雪印乳業株式会社

〒065 札幌市東区苗穂町6-1-1

CORNING

組織培養用プラスチック製品

ご満足いただけないCORNING 組織培養用プラスチック製品は、無償でお取替えることをお約束します。



PYREX®のコーニングが提供する組織培養用プラスチック製品は
実験のバラツキを解消します。

●無菌生産

コーニングの組織培養用製品は、無菌環境で作られています。このためバクテリアは勿論、機械油の蒸気やほこり等の付着もなく、培養特性が安定しています。

●フォームラック

コーニングの遠沈管・培養管には、フォームラック付きがあります。収納や運搬に便利なおうえ、ガタツキがないため傷をつけることがなく、沈澱物が再浮遊する心配もありません。

●100%リークテスト

コーニングのフラスコは、全数圧力試験を行っております。また厚手に成形されていますので、リークやクラックの心配はありません。

●ダブルシールキャップ

ダブルシールキャップは、容器の口部内側と端部の2箇所でシールするもので、漏洩を完全に防ぎます。

●クロスコンタミネーション防止

マイクロプレートは、孔が独立しており、クロスコンタミネーションの危険がありません。

CODE	品名	品種	個/パック	個/ケース	材質(本体)	表面処理	滅菌	備考
25000	ペトリ皿	35φ×10mm	20	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	
25010		60φ×15mm	20	500	"	○	"	
25020		100φ×20mm	20	500	"	○	"	
25100	フラスコ	25cm ³ (70ml)	20	300	スチロール樹脂	○	無菌生産	カントネック、ダブルシールキャップ
25110		75cm ³ (270ml)	5	100	"	○	"	"
25120		150cm ³ (600ml)	5	40	"	○	"	"
25140	ローラー ボトル	850cm ³ (2350ml)	2	36	スチロール樹脂	○	γ線	ダブルシールキャップ
25200	培養管	16φ×125ラック付	50	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	ダブルシールキャップ
25310	遠沈管	15mlラック付き	50	500	スチロール樹脂	—	γ線	許容遠心力1800 G、ダブルシールキャップ
25330		50mlラック付き	25	300	ポリプロピレン	—	ETO	" 5000 G "
25820	マイクロ プレート	24孔、平底、蓋付き	1	50	スチロール樹脂	○	γ線	
25860		96孔、平底、蓋付き	1	50	"	○	"	

●表面処理は、親水性と細胞親和性を与えるもので、コーティングではありません。
●ETOは、エチレンオキシド・ガス滅菌です。
●詳細はカタログをご請求ください。

岩城硝子株式会社

本社/〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 (富士ビル)

本社販売部 ☎ 03(214)7401(代)

大阪支店 ☎ 06(362)6291(代)

名古屋支店 ☎ 052(211)3855(代)

九州支店 ☎ 092(451)5606(代)

広島支店 ☎ 082(248)0293(代)

札幌営業所 ☎ 011(221)3477(代)